共古日録

一

駿河
東富士郡
山本町
中南
笑裏
共

特別
15
1413
3

門 15
號 1413
巻 3

早稲田大學圖書
昭25.10.24
購入

共古日錄 一

寛永板
いろ刷
原板なり

寛永原板のいろ繪図と二板あり（いろ繪図々説に引れ）
彩刻あり（繪図の物とく二本節）
此に重刊板と刻しあり（繪図原板のと外に別道とあり）
寛永年間の再板と見（世三年の夏下谷立行堂にて）
にならず一本のみのあり
と見る書像は同じ

仲像同合
原板

元禄原板の仲像同合は双身の歡喜天の図あり天明
再板本ありこれと改て第三の尊像とせり又和漢三才
同合原板なり獄門の図あり（後板のにはなし）
古錢家の話に千々大千錢は元の皇天錢と異製他類似せる
錢なりと田蓑里話話神社の神職は錢を和義さと
とせらるこれと元に皇天通宝錢の那なり（如此皇

千々大千錢

山中共古記

大鉦に類似したるものの説も恐らくは皇室の剛毅なるを見
て知るべきなり　神職の家に古瀧文堂の所蔵
なる銅色黒色の鉦あり
石山出土の和同開珎鉦と東面湯殿あり　和同鉦以下の有
銘鉦は湯殿あるも和同鉦はなし　古鉦今翻刻の中に
収められしが　此鉦を見るに　此鉦根岸武香氏蔵
播磨国のヒトミ塚とて　鋳鉄の片石
とわかせたる焼土あり　とかさみ五輪塔
もおなじくこれと類似　和同子者とかきたり
同じ所の話は多量に出る　播磨にあり　又書写山に鋳
鉄屋形形のもの墓あり　一は墨江古梅岡に春日神社の
奈良の三大鉦あり　一は墨江古梅岡に春日神社の
宮司三人東大寺の執事　福地二徳と云う福地氏の家

播磨ヒトミ塚鋳鉄の屋形の墓

鉦湯殿あり

東都三大鉦家

は代々一徳二徳とかりて名のることとて今は二徳なれど
次の代なれば一徳と名のるなり　なるほど昔よりなるとか
攝津豊島郡　出土　中村發掘されし　すにわの立つる墓の
如く九さ一尺八寸巾二寸位の青石のせあり　と林氏の
話　中略　あり　実物なるべし　はにわ円筒と
説明する面白き　松村氏
相州丹沢山の永禄年間の刻されし石像　設行者の
像あり　と

まいてさの立たる者
あのようなるもの
の説

永禄の石像

浅草寺所刻の書目

浅草寺所刻の書目
浅草新誌　川井景一著　明治五年出版
浅草詣往来　中原新恩著　享和二
観音現身図像

浅草寺年中行事　写本
摸の葉　写本
浅草観音名霊抄　板本
諸社縁起履歴
浅草寺地名履歴調　写三冊
浅草志　写五冊
浅草寺旧蹟考　板本
金龍山攝待所永續連記　板本
浅草観世音由来記　板本
仏法浅草之所一覧　一枚（年号無し天明時代）
東都金龍山浅草寺図
隅田川八景詩歌

万治寛文比丘板絵入本浅草観音縁起記　板本
観世音霊現記　板本
浅草観世音由来　板本
浅草観世音菩薩実伝　天明ヒナリト
浅草観音霊験図　板本
絵本金龍山浅草千本桜　事材文角抱図略伝図　板本
浅草寺霊験法華経　天人雷神等の彫刻の写
金龍山聞潮音記
浅草紀勝　漢文写本（うひひ本板本）
浅草寺

右うひひ本の要書

右若観世縁部

以章句合板行
者也

後学諏訪所
岸本休園

享保十三年
戊申三月十八日

合力稲荷の社の事

以上ハ書籍中の重なるもの也ニ枚ものなり
後学合力稲荷のとなり合力の社の社ハ成宮稲
院寺中に格木神社とも社と渡宮神社とも
支婦なりとて両社を合せ祭しよう二ツの神の力を合
せしとの意なり合力稲荷といひしも
三谷の八百善とハ八百善元宗元なる茶あるハ野平八
いせ料理方なりしと平八楊場ハ南口百間の地面也特

あ神ない

畑の中に寺
三ヶ所あり

大神力天祕決

宗二年の板碑
国語の古板

に寺ハ三ヶ所あり一ハ養徳の天みのげ
国分寺大日堂ニハ大山街道馬入川の縁ち寺木より一里
祖師堂ハ国分尼寺の鐘ハ鎌倉の線国分寺
なりと国保元年と記ス鎌倉の部金光明国分寺の板ありとも
神力天の事を番く記ス書ハ金剛寿未詳浄厳記
まと記せる上下二巻の大神力天祕訣と題せ板本
なり書ハ正平二年の板碑入間川のなりなりしが今ハ無し
正平二年の板碑入間川のなりなりしと
国語刻本の始メハ北宋の明道二年の刻本なり社書嘉
慶重刻より翻刻本まで駁して天聖明道本国語
とあり宋板の古きもの也

孔雀の寺と云ふ
拾石の寺

天狗孔雀の寺社地今は為せりもの至て希なるが錦金、
拾本の觀ろいの小門之一枚堂之一枚発とあると納札達の
成堂七彩の二尊堂住寺 林間に入る
拾所のふ寺

拾所と云ふ野荒戸村産体神社也より東之
而て見れど西北は見當らず又相撲川の上流まいあると
云尾山より見る下流まふ見当らずと八木氏の話し

五文銭

越中國古國府より無文銭を出せり綿屋
藤八五文壽妙と呼ぶ壽藥より中橋之屋せり綿屋
茅八とふ者ありと無茅壽のひる カロシコー壽とふ
ありとこれも壽茅なり

カロシコー壽

鬼ケ岡より三丁程の地より堅き赤土の層あり此層中より
石器をあるすと佐々木氏の話し

横穴

横穴より二三人の人骨を見る塚穴まいる人数の合葬あり

人のいたぬ山まあり と足利氏の話中

上總国新地谷新國寺の本尊薬師佛は建久の年
ちと其後鎌に向く

鰐を食する 近年の手根岸武吉氏の父の
代まで鰐捨べのとの制札を立てあると
今ハ十年前の比 上野新田郡にも鰐捨べの
らべの札あり 田越後にも鰐を食ひ知しい近年の
をなり 又土佐にも近く迄食せざりとと

正倉院三ッ倉

正倉院の三庫 聖武帝の御愛物をルシヤナ帰 お納
めなりしものと 献物帳 当時皇族其外の美
も面を納なるもの 用錄追加 献物帳の文 浪
なるあらべ 足利時代三庫の一なる南より第一の庫ハ

元来東寺の庫にて御庫ハ二ツなりしが如何なるゆへか
東寺の庫なり庫も勅封されて官ニ取上られなり
此時東寺の所有物も御庫の物と混入して一となれり
彼の古文書の也券の如き東寺のものなれども東寺のものなら
ざるもの又維新の時手向山八幡の寶藏中（三庫）
のものと移されしが互に轉びかへ（三庫）（四の如くなれ
ども）なれども此轉の際八幡の宝庫中のもの三庫（
混入し和物中のものも世にまれなるも有しなれども奈良の
面の如き元来東寺のものなるも敷物目録にもあらぬ
ものまて八幡の宝物のなるもしなり庫中の宝物七ツ迄
ハ本邦製なり五琴の如きも目録に銘ハ東大寺の
宝なりと唐ハ大唐高麗ハコマと訳書しなりと猶也
猶一区の法ふるる

下谷入谷町辺の南蛮寺跡

下谷入谷町辺の南蛮寺の跡
鐵佛
あ戸の毒王
鐵佛ハ洞東ニ多く洞西に少しと南都北圓堂佛堂坊
の壁にハ数多の鐵佛ありと鐵佛の名普通ニ鐵佛と
いへと板佛ともいふ又御正體ともいふ
安戸房　邪豊戸房村宝東長田村　安西某なるものこれ
土製毒王数個發掘されし事ハ大野延太郎氏談也

信玄椀の数

銀和同出土

（孫）ゝ（孫）これ同じく（ら）敷ちい人類学雑誌
ヨおたり出土ハ祭器にて用ひしなる歟両神社、
あり（と）今ハ畑となりて（ら）居ハ（ら）ぬ（ら）ぬ（ら）ぬ

マレイ人の日本人に称する意
マレイの祖先石器を用ひたりと見る

不意なり歐州人とフノレミシャムを呼ぶフノレは赤色と
不意なり赤色の極く他人との意義なり
マレイ人は日本人を呼でゴレイと云ふ其意を詳まさず
マレイの祖先は石の器具を用いたりと見る石器を祖先業
のものとして藏する家あり

浅草人形

浅草人形は三代の製作にして中村小祿の作これは土製なり其次は
入形なりこれを初代とす次は中村小祿の作これは土製なり其次は
落合芳幾の作にて紙製にて此頃もちりもを
も殺し実そのもの

蜀山人の狂歌

蜀山人の狂歌とよみて當時ふのるのるとうたひ井近の駕籠
賈をもちりなり今一分まで少まれ井近の面しかし籠で見るゆか
れたることく覺の千と唱の狂言集る
小金井桜花みんとおもひしとまりてちず
花ちるも先ちんでなる
まるわづのきまの小金井のうぐ

四谷大番町古塚

心の月を合こ節度の華ゆえの古の四谷大番町にて古
塚を切しに鏡其他の器物を發見したる此塚を昔の墓
の塚との古をこれを切しものの古をとよそ其墓とおもひ
私の心をもて狂人となりこれまで繪の石具をもて買うて
大名の私なることをなせ狂人まれなりと大番町の何
れなるやなるぬぐ古塚あり

米菴の書物

京河米菴博物館納の古器中に（博物館納メタリシ外續キ出リシ）古鏡一
面あり經一尺一寸弱重三斤三十七匁銘四字壽山福海と大
字に鑄出しあり銅色青黑附箋に大中共宝の頃と記せ
り又青貝摘花の硯あり臺の函あり漆色古代のものなる
跡なるものと書る銘ありて附箋を記してあるなり

御會文具八方忌

二拍一

石山月見堂にて
嘉慶元年丁巳八月十五日
青貝師
難波住貝作源進

又茶菴のうちさんし朝鮮奴大学衍義ハ大本にして十行十八字の書にて原本の巻一冊欠けたるを幕府の命にて写補されたるこ

支那の古き書中に記せる異國ハ奇怪なる者も多く見めれど中ハ事実のもの見めし三才圖会に出せる足長手長のものを面白しと見めし長脚人ハ海の東いあり其人手を垂るれば地に至る昔人ある海中に弱て一ッ布衣を張り両袖長きを各一丈餘也とえれい記今支那服のごく手長き袖をつけたる古着を見て袖の

子長國又屈支國の考

支那の石笑

信長短き衣服を俗にせ一者奇異とかるゝ手の長き人も住みたるとまうくこれをせ一ものなるこ又西域記に屈支國のことあり其俗子を生ハ木を以て頭を押て其扁平なることを為すと今の米國に住するインド人中ハ行きるかを用ゆ一也こゝあしと賞め

理学類編ハ雷霆を論ずる中に世人所習雷斧ハ何物ゾ曰此猫星須ト石と為がかしと記せり石斧ハ支那いも多くある物と見め本草ちどに記せる雷斧とゝふもの何れも磨製石斧なれハ考古の学いまゝ心ゐるある者能行せバ古製石斧をもくく及見さるこをなるこ

元禄二年の古板江戸絵図二板あり

元禄二年出板の江戸絵図と江戸図鑑綱目と題せし

寶永五年の圖

正德三の圖

應仁の年号ある件

文亀の古鐘

圖と江戸の諸事を記せり書とも沿錄なせしものあり元禄二春圖畫作者畫工石川氏後之板本模
二通あり元禄二春圖畫作者畫工石川氏後之板本模
屋大兵衛と記せるものと元禄二春の文字なきものとあり
寶永五年の圖に寶永五戊子年日本橋川瀬石町書林
山口屋須藤權兵衛藏板圖工石川流宣江戸岡林太平
衛本所とのみ書あり正德三の圖まい正德三癸巳歳圖工石川氏後武陽書林日
本橋南一丁目萬屋清兵衛藏板とあり
冨賴輔男の所藏古文書中に應仁弐年戊子五月八日の日付
ある御影堂牛王誓紙あり
信濃は見定がたるが古鐘長谷寺は辻坊と刻せり元亀三年壬申三月吉日榮秀
と見たり

出土經筒發見の紙幣なせし經巻

二永年間の宝篋印塔の図

永正十八の經筒

東大寺の磬

當時新に郡和村東城寺供養塚より出たる經筒中より出たる經巻まい天延天治等の年号ある紙
貨なし經文明かる讀れ得るもの大字なり
とい書のと二種あり大字の方は慈恵大師の筆とい
況あり
平安時代の經巻の書の如くなるて見こ
拾ひあられし宝篋印塔の左右に
如く
四面に

永正	三月	滿願	百ケ日
九年	十三日	聖靈	〇

刻しあり
明治十二年山城鞍馬出土の經筒高サ九寸巻三寸左の事ありと
永正
十八

東大寺大金堂所用磬まい沙弥觀如と彫しあり此磬

法華寺鈴宝珠の銘

ひの人とゝ
大和法華寺ゝ為寶珠の銘
奉行
斤桐東市正
旦元
六年
吉明

慶長
九月
法華
講堂
秀頼公
豊臣
滅罪寺
御建立
御母寺
北政女

来迎寺の鐘

坂本来迎寺の鐘ゝ
丹波船井郡ゝ
山内三宮ゝ推鐘
ゝ九三尺四経九三尺銘左の如し

本願人数之事
沙門覚傳
沢田下総守

「中真与三右衛門」
桑本　市兵衛
乾　善右衛門

「所瀬大工右衛門」
森之　大支
大工者　和智
大迫三郎左衛門

「元亀三壬申年
菊月　吉日
天正八辰二月廿六日

及本来迦寺
維信向守光秀公御寄進

東寺鉦鼓の銘

右東寺の銘文中衛の字勝と彫りあり

東寺鉦鼓の銘

安貞二年三月廿日
為現世菩提後生菩提奉施入東寺舎利
藤原為定等

室生寺の火口雷鏡

大和宇陀郡室生寺に室生の火口雷鏡と名付る拝佛の如き銅器あり耳あり拝る様なるもの蓮座の上に輪寶と獨鈷あり上に三つの宝珠ある形真中にあり
上下左右に那銘あり只今の経ある拝佛のもの

東大寺速房古鉢

上部に右大王相殿 左春日と刻定 下に沙門如の三字あり右に弘安十年戊子 左に卯月三十日とあり

東大寺一徳房の古鉢の底に 中筋高く左右ひく彫
下ケあり 側面四方に
一徳房
正月廿三日
永正十年甲戌
底原鉢

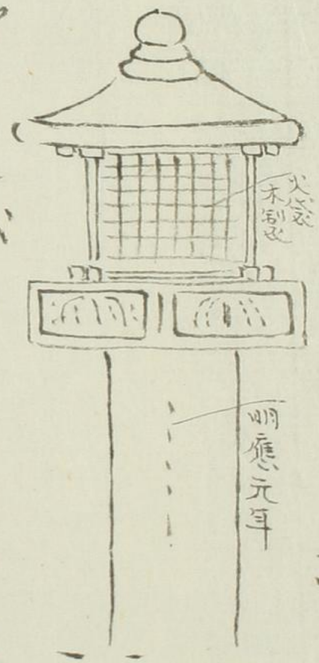
又一ツの古鉢まハ四側に三面文字あり底に 彫あり
十分
一徳
天正八庚辰九月吉日

大德寺洗子

大德寺孤蓬庵の洗子石盥い布泉の銭形を彫刻し高サ
九一尺九寸巾一尺九寸程ありて
泉の字
大泉五十銭の
ごとき篆体なり

春日社内の
古燈籠

春日古石燈籠に明應元年 天正五年 天正十年 なとの年号
あり



長谷寺十体仏

長谷寺十体仏 天武帝の御願にて
この寺創建

藤森神社
狛犬の銘文

長禄の古碑

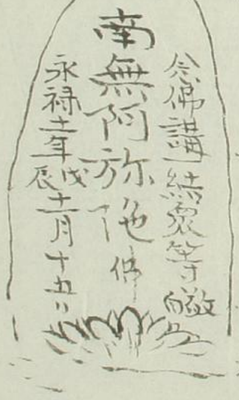
山城藤森神社木彫狛犬の腹に刻してある年号は補修者との
なり 「徳治三年丁未 荷田延行修補之」 なと刻してあり
古碑に 「長禄三己卯五月」
「揚生庄地子弁」 なと刻文ある
あり

天文年号ある
石

宝篋印塔の基石なるべし 地蔵尊 釈杖を持てるを彫刻し 天文
十二年の文字あるもの 奈良
の古碑なり

新薬師寺
石碑

新薬師寺にまのあたり石碑あり 左の碑
同じ文字の刻せる書の後を
先にて刻せる燕尾の碑の
刻せると同じ



天平の古像

和同の露盤

延長の金銅鈴

寛弘の鈴筒

康平の三鍑鉦

天平の古像として最貴きもの四つあり

其一は唐招提寺の鑑真和尚の張ぬき乾漆製の像

其二は東大寺良弁僧都の彩色木像

其三は岡寺の義淵僧正彩色木像

其四は法隆寺東院の観勒木像彩色無し

談山神社の露盤は和銅四年八月

生駒郡額安郷の鈴 延長七年 己歳次丑

吉野郡金峯神社鈴筒 寛弘四年 刻八月十日

子向山神社三鍑鉦 康平肆年 歳次辛丑 参月拾肆日

次の四つは要見なせし今石年表の補ひとして

知うすしもノナリ

極楽院柱上の彫文

奈良極楽院本堂東北隅柱上に彫りし文

沽却　家地新券文事

人 五間参尺 間

左大和国添上郡元興寺東岩井辻子東面小端

四至 限東路 限南路 限西辻子 限北大道

右件家地者秦三子相傳私領也而重弁

買取畢事実又譲与千保毛女畢而保毛女

令沽却極楽堂七畫夜念佛五番成仕

畢雖経永代不有他妨仍如件念佛等

仍以地利長為五年五仲堂其日僧供不可念佛

爾如仍恨永代念佛ふれ所に置但於玄蕃
若燈浮屠

文永二年三月廿二日
慶安長板四鬱千字文の終に
慶長丙午歳

金宣開板

一説に西伯千字文ハ朝鮮板の翻刻ものと或ハ然らん
慶安長板千字文

七沢屋雑

此の端伴所に七沢屋とゝりてるもの豆雛人形を作り賣出せし
と一寸位の大サの雛人形にて子のこみたる細工なる五位立位ひる
型ゑんちゝと今ハ社家なりけれど古屋具屋の等帳そばる
ふさ子のこみたるものを七沢屋とゝりて豆雛ゝ出なるそばなり

貞幹自筆の錢譜

一枚ずつ番付

西京の松井清風なる者拙子武者文ゝ遠し藤貞幹の寛永
錢譜ハ白紙ばかり形本にて自筆にて書なり終に記せるハ
錢譜五寛永錢寛政年歳次壬子春三月没正　藤原貞幹
とあり自筆寛永錢譜ハ三四部なるを知れど錢譜なるものを未
不見
一枚ずつ番付類に面白き参考材料のものゝあり
名代名物為手覧　儒者合　姫路　嘉永
儒者競　天保三年　大江戸名物流行競
江戸の花當時の雷名七福人（從他賞誉）
東都出発高群　食類名物名呂藝能　嘉永三年
關八州田舎ゝ根ハ角力番付　拳相撲　弘化五年
茶人番付（後編）安政三年
力鍛治番付

現在雷名江戸文人和漢藥種見立

現存雷名江戸文人花競

文人見立東海道五十三駅

江戸雷名文人見立中仙道七十駅

江戸の花　もらった

人の言重言くらべ為ち心得

牛馬見競鑑

名人鑑

大都會美人揃娘評判記　安政五年

もちゐられるも　なあいたのもの　世中當座帳

騎射人名　安政四年五月

大日本甲冑巧銘錄

文久三年

大高八百万両諸高人

當時見立三幅対

名方業妙茶寶

花菊蒲

造菊道順番付　未の九月

新板江都一菊此道順

江戸流行買物重寶記

角力番付古の番付

以上の数の番付江戸時代の諸事をもるる定るて面白し藪

多くあれば此に文記すること あるべし

角力の番付の古きは寛保十七年正月吉辰と記せしものと云ふ

伝れかる原板なれども此の再板のものも希るあり寛永二年四月

あり角力番付は写しは偽られど原板を為せざるとぞ

中橋の図あるべき

絵図

京橋と日本橋との間に中橋と云ふ地名なれども橋は無し寛永
南枝の江戸繪図に中橋の橋かゝりたる図あり承應二年の江戸
繪図には埋地となりて橋の図なし　寛永南枝の江戸繪図まゝ
年号なれどかゝる紀後字の違ひあれば寛永八年前のもの
なるべし加藤は八年六月五逆の為に誅せられぬ承應二年
同廿三年同なれば廿年以後埋立となりしならん

千社札に同せり如白

扨白規矩之志ちと類せる書き安永八年の白扇なるが當ゆ
千社札ちらせりせる所あり

入形師名書

千社札書く例て讀むいろ扇又　文刻
花の盛り〳〵浅草のうた　梟里
弓富山と云ふ者十軒店前左側に有て五月人形を造りしを
き入れしと云書の作のいせ引雛人形の七段ゑぞるを物するものあり

物の名とゝ

文化文政ひのもとそで
扇の名とゝ　村田河の流ふ扇の名とゝ
の書扇とゝ　ゝ　永正前後の俗言　昼雪秋廿一京に
下の源あらぶ扇の名とゝ文字ある扇を懐ふ　常に人目忍ひ
みゝし　と野き歌從四位ミ武京の部にあり

京師名所尽

徳川幕府の比京廻りの木像又は画影を祀りある社寺安房道
順を記し一枚摺りにせしものあり初板まゝ扇名をすべりて
東正觀世ゝ知とせ　ある片の如くなり
東國恩東正觀世ゝ

扇名礼所御祭例　年四月十七
扇用御鏡所　大隅焉所二十日　村田　山城
　　堅貫　村田　七兵衛

四の海渡神にして百民心安く二光を淵さることを
さゝのひしまそんの神のの恵みなれば父母を養ひ妻子をまご　吉四月十七日ミ神

奈良春日山地獄谷石仏

晋代古墳

こむ者いの恩の報を思ひの慶為いね礼あるとまるれど
のゆしなるをいなるけもばつやーきものをめるつをまるる
からめをやるるたるーと不心同じる人々のをるをせまゆと
不斗りこそ
と書こてあるなるのあるーなるものこ数の一枚ざるあ三種
あるるの地をる神祖頭好ミをとこ行ある東京観をるをせしが
をるめをいられてらるをるりるせーと見め
奈良春日山地獄谷宮林字馬背とふところに聖人窟とふ
ある釈迦如来の像石面に刻したる石仏あり年号なけ
れども古代不明なれと近代のものにはあるべ像のこるこ四尺ある
あるるるる風致言に石掘撰をなるるるて見せられる
二節の博物館蔵に古墳一枚あるる見の横に立三湯立ゐて

永楽銀銭

正應鋳ロ

永康元年正月廿日楊州丹楊秣陵王氏制作
とある晋の年號まて以るものこ南京雨花山發見と汁笑に
銀銭永楽通寶を書を以のものとい〳〵とえ孫以迄もるるる
鑄なるものと見る西蕃の七月をるるる指ものの町の村で男太郎氏も
宮田宮井の世話をるるて越後の人ちち泉を買ける男中に
永楽銭銀鑄のものに石板あり銀地にるるも黒黒
るるもある文字をも小異あるて一ゆるるるべ
一種極印制の銀永楽ある銀弾ぐるる京都の銭商に紀州加
銭とい〳〵紀州家まて使用しるるものと紀州家のあ鬼の紋
永楽銭るるもいかに関係あるるるか
奥州大鷹宮鋳ロに正應六年の年号あるとるく

紋井村の名

古京河下紋井村一村の四家の紋いかれも
一いて紋田の紋の者のたるところと京師とる地あると
今有やそらんに紋ん紋ん紋ん

一つゐだく墨書し土中に埋たるもの出て幾ひろ始め
かゝはらぬど經筒と連帶きたるものなるべかと思ふ世平の
川内七つのゐる郡郷に水源郡須郡烏山町に泉涼寺とゝる
古刹あり後小松天皇至德三年源小前祥鶴等ものや本堂を建る
故下の山中より直經四更許りなる石庫を發見しなり上部の石蓋
あるこれを拔さば中部に印形平面のふくを猪み其上に彩多のふくを寫
ひたるがこのふくの平面まふに法華經八巻の上字一字宛を黒書しあり文
字經文のゐる處古の慣あるは大雲師の語る所によれば延寶年
十五代の住職雪心和尚が信徒の中より百六人を選びいろを撰
法華經を記さるものなることあるはもとゝそのゐなるべしと
記載されなる社説は信ずべきまで
古をゐるものにあらべ經筒を埋むことゝなる易きもあれば

かぐるび
厂前鈔

奏ゝし行れなるゝを見め
ゐぶ藏さる經石の出るゝ
筑後三井郡御井郡の彌高良山極樂寺發掘跡
安房小湊延生寺經石
讃岐國郡はゝ
二總國長生郡大字東郷字七蓮出し見い經文ゝ字を記せの
見えまるゝ他にあるもらべ
瀬尾柳齋の言葉丙午歳に記せり拔閲錄に標筑の雅言誌の
歌あゝ
ものなれば さーいさんれて 砲頭丁のゝまも ゝ世のさらも
波の面のげ
寶政八年の一九歳に黄表紙琴誠迴用青袋語と題せ

瀬戸名作の
こ作十作の
かき方

ものに煙管がんぐび迄かめめやと活す画あって其間に「かけ
さぐりのさぐりにちらちらつてゆくんぐびせるまでそらうこ」の事
ってこのせにそそふ一文もちち」と煙管ぬ文言保ひら
あ〜ちてふ前記の板況塩にちちまぬ
こさんてあるも面白し

瀬戸名家に作十作と名家六作を定む
總ち大支字長ふあ閲こ第瀬戸ふて

長十 丁 新兵衛 ○ 慶長 十 慶長第 ロ 市右衛門

ロ 市右衛門

天正三年 古田織部正重勝瀬戸ふて名家十作を改定む

七 半七 廿 六兵衛 山 喜兵ふ 七 治兵ふ 力 八郎二

高大寺の下
ある寛喜の
古経

ハ戸市中
高へ字数

佐か一 三蔵 ㊀ 五十 ㊁ 八郎兵 イ むハ

古瀬戸名作の印ハ唐四華ぬ次の字ちれ書ふ記ふす
四此の古ハ古の中の字ふ見ふとで
寛喜の年号ある古写経を見たるが裏に 東大寺八幡宮 の黒印ある
経ハ大般若経の巻ぬ
ちる

ハ戸市中の書物呼聲
呼聲も中に迄れもち
もれ、ば戸ちく戸ちと
そ況てつるすて能ざる
○ハゼヤ〜〜〜

(三月二日ぬ〜〜ゆ)

○まらひ扇箱さヨー（三月ゆらい長）
○すーヤァーさいはだのすー（春者）
○からかはー からかは（三月）
○のうやまーのう のうやまーの
○三月やりーちさー（凡鈴きりこきりこ）三月やりるが
○そざうハイ ねぐちんざんとろぽが
○新狂言かほみせの当り 三芝居総役者絵尽り
○山川白酒り
○鈴のお茶碗にハゼが一杯あるうまて愛でのあるし
○鈴の中からおたろうと金太郎とあんでもろてよ もりてる
きせるのもれでも火箸の形れでもトッカイ〜ニヨ
○砂糖ワ金時

○案餅（ニヤー） アワモチ（凶のふる〜拝を当てココ案を案せて呼ぶ）
○おぼうの上でも箸箱でも ピョコリ〜の俵が四丈
○柳の虫やあかぐろ
○揺籠や
○繪馬やえん神 松（咽ひに易く）
○山王様（さり） お祭りの番付
○明神様お祭りの当り（神田）
○八ッ八通りにもるふんふく茶がま
○おる様の腹芋 案の水鉢
○トコロテンヤカンテンヤ。トコロテンヤテンヤ
○氷水 ヒヤッコイ

○竹や（七月前日より前）

○ヲヤヒナイシ　お雛雪柳　ヲムカイ

○かやー　マリうがやヤ　小ロがヤ

○深川名物ちりんとん　芝ゑ

○のりや姫のり

○塊地（ヨーチ）や豆（ヂョーチ）やてちん（てをち）

○豆やゆでまめ　ゆでまめ

○まる（四月八日）　あしのまる

○来年の大小柱ごよみ　宝あらて　三月四日の雛宝

市中寺数　ちらうめもの　ふるいもの　まるだら　ちらうめ

いすコイ　利から　あさりなど　此あらめ　ちらうめ

市中高岡寺の古大仏

武蔵府中善光寺の鉄仏ハ二所明神の地にあしを近年社地より社寺引きたるものゝ鉄ハ繁めらしく錆かゝるもの多くあり新編武蔵風土記に全文載せられとも記にあんが

ゆゑなくしるす

大勧進谷河弥陀仏明道大之藤原勝近

右志者道之二親行厳新発意乃至法

界衆生平等利益奉鋳一丈二尺大仏身也

建長四年二月十八日　願主　初日

古老の話に国分寺より一丁程西南の地に鉄ヶ谷と云ふ所あり此地

より出たるものにて恵と宝の二ツ

此鉄仏のまを今に残りたるとの事

（昔年八月三日府中の古老に聞く）

内閣文庫の切支丹書目

内閣文庫の書ゝて内閣文庫ノ別次キ たるキリシタンの書類目錄を得たるんが記るす

切支丹来朝記　一冊

切支丹物語　一冊　切支丹始末記　一冊

切支丹邪退治記　一冊　算量全撰

吉利支丹物語　一冊　吉利支丹略記　一冊

契利斯記　二冊　火四方撰

多賀城碑搨本の模刻見分け方

多賀城碑搨本は模刻なりとあり　火槌文字の活字

西と云ふと多賀の城と云ふと神社と龜の字の字の事の部の地の文字に類ふに大きものゝ真ものゝ

西此城神の西と云ふと龜字の字畫の大きこと寛政以来

武者此文字なりといせんとて力をつくさるいたるを正めらん

多賀城碑搨本の模刻見分け方

なるものゝに書てこれ文字大くなりたると寛政前のものに大くなりたるものゝあると文字物の里数の五百里の百と云ふの行の一百里の一と平らに並べあり一百此ハ平らなるべき模刻なり又模刻の行の下の鎮守の文字高真物いかくなるべ

信濃松本に和代官なる圏本近江守詩を作て猿を禁せり

民に言を与へし時詩を作り田畑へ立かたるに猿田畑へ出て人猿を追ふ

と作る詩

年年蕃生國土恩　任山何得害山民

拆看猿字述意文　論汝前今知愛人

圏本ハ勅定奉行を勤めし人にて学問にすぐれて名高し

猫を猫と云ふ現実の土佐猫

猫あり　(メ)　九メと云ふかをあげたる

猫さ猫

印あるものの元祖のものなる歟なるべし矢大臣門の右手に書[illegible]

筑紫稲荷の大弓の化人

武州松山筑紫稲荷の社に大弓の木彫あり東都大奴長とゝ[illegible]
彫物師の化と共人形如の名人にて筑紫稲荷の絵[illegible]
天保巳のもの[illegible]

古刀布の價

支那古刀布の也来程多く渡りたるさま明かなる廿五本金七
圓にて賣りたる者あり齋主貨五本を四圓にて賣りたる支那人
の高人あり古文錢古刀布数價[illegible]
[illegible]

法華貞応の古經

房州小松寺所蔵の大般若波羅蜜多經巻[illegible]
貞応二年十月[illegible]
[illegible]
[illegible]

小松寺の古文書

房州小松寺に伝る古文書
[illegible]小松寺領[illegible]
古[illegible]
申[illegible]
天正十八年庚寅九月廿日及[illegible]
小松寺別當
[illegible]

又一通に
[illegible]小松寺[illegible]
[illegible]
[illegible]
小松寺
別當

義原[illegible]

蜀山人代の車留れ

蜀山人の一話一言に車留とれのことを記しあり寛暦の頃牛込中徒町にありしと御用之外車不可通とあり其後の如き御用之外車留　車不可通　等あしと記さず

蜀山の記一寸の石像

蜀山翁筆のものに寸の石像道端にあり里俗用通ひ如ふるあるとこれをせミ出すこと見たるこれ神社の石像ならんが分あるまじ否とをらず

八幡宮七福神の事

牛込七福神の由来

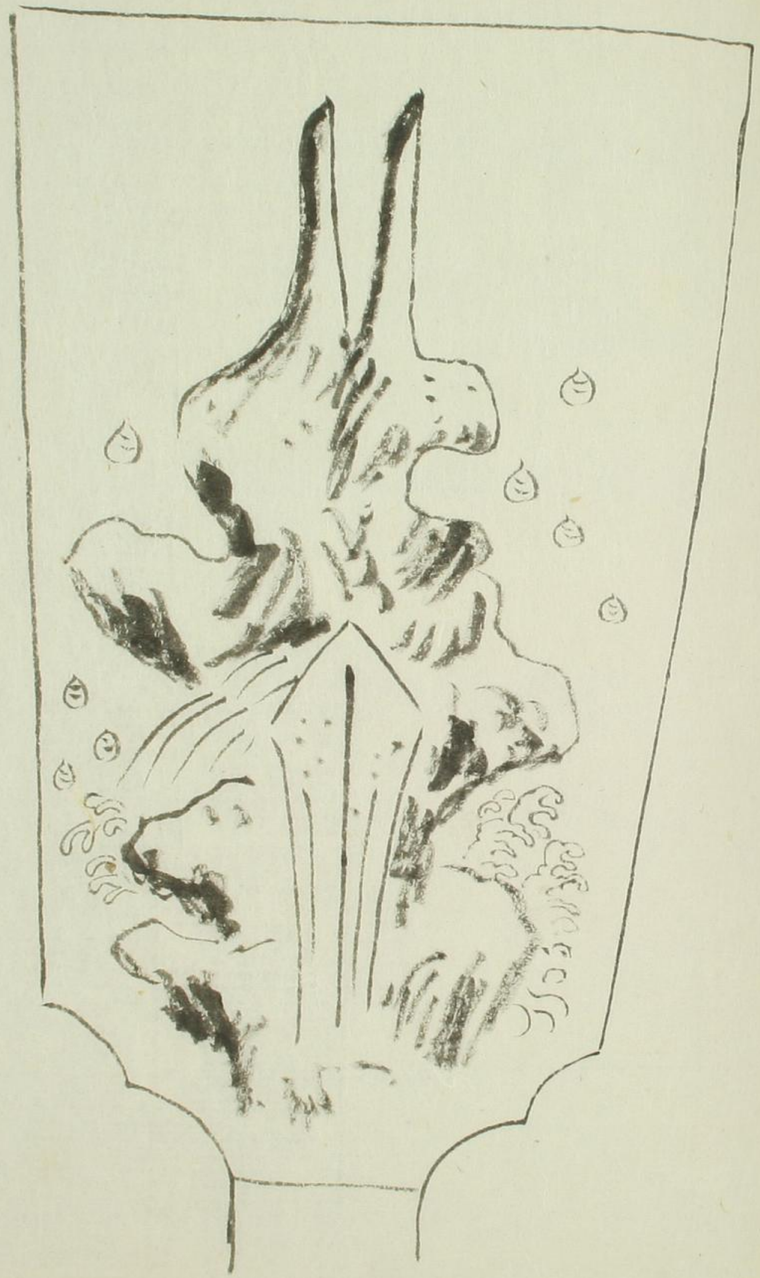
牛込七福神の由来

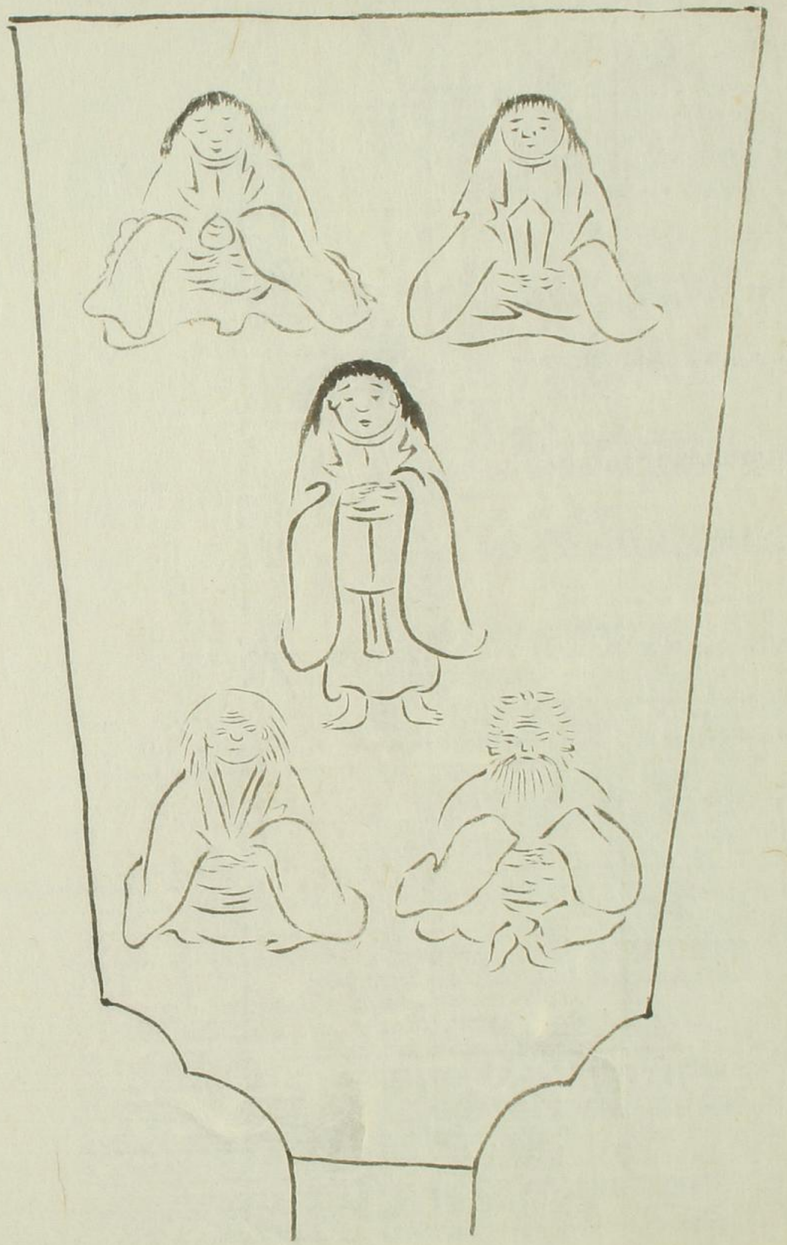
牛込の人あるとかの七福神の由来をいふべき筆記を見たるに此寺の昔三世住持の時にいたりたる高富精舎の事なるの所用寺の所用寺とかの所用寺とかの所用寺とかの

[illegible]

[illegible]

[illegible]





元祖大師ゆかりとある香筒

元羽又拔さ言保て卯七月十九日八重垣宮殿と記せり筆文の羽又拔
図説とあらせり記中に三浦義綱貿来訪羽又拔図一紙示之且渭
此図刷部家之古記ここにとて
とのはかりみはさんをようはえんからおちたおちの人
の羽又拔言と解況してとの図とは素数物之図は源四姫手磨
乳是磨乳皆以乳為称渭のおちの人とは中洪のは大巳者之とて
京面の山さ雪ぬ八戸又山ちとはとをとよ(ほ)ほ者ごとなりて者物の宮
か中古以来者人を称すに同じと社図説神ふ成の妄説のかきもの
ちるが言保以いかるる羽又拔図説を記せしものとぶる
思ふが白鹿舎の筆記数数集一ちらしとる
牛也ふ町の古道具屋に長さ四寸程の銅製の遍筒の書物
あり表面は三本の棒を振るるのいて別に飾なものにもあら
ねど銘彫はなりとりんば社図のごと

浅草長寿山経王寺元祖蓋屋

年月は彫り無きも元禄ひのものかと思ふ日蓮を高祖と称する迄に
いつと元祖とせーさらし又長寿山と称する項昌山経王寺
と記せり長寿の方が正しのらんと思ふ沒と記しかるんが今
さかるの遍筒東京に多見れ弘化の比神田永籠町に多図を由義といふ古本とある社書
弘化の比神田永籠町に多図を由義といふ古本とある社書
見る所数いるーてあるの出来事を見聞するに過ひ筆
記するを多年其日記ちもりて百五拾余年となれり社書
今は　比の所有に今せり頃い飯山慮心比社書中より当時
の為前元言ちどを為め天二言銘と題し五三巻の書と編せ
られしが文字学博尾学の人も西社日記中よりるるの人

日蓮宗図説の日記

物を好まれて殊の中の清めと称し白酒（おさけ）を
さいらす

孝行糖（こうりう）

弘化三年二月の頃より孝行糖と云る菓子を煎餅色に雪洞
に付のるの白たる半天をそて
うこんの三尺帯をメ壹
あ〜せうふ

「むむ」そのむむ
蕎麦のその中の亀屋と云
人は親に永いきさせうとて初めて孝行糖リ
トコトシ
「孝行糖の生涯」変の影の寒晒し。甘くのの太白でこにほいい
。こうけいぐるみにかやのこたくてみなおいしうろまる孫方

はらまふトコトシ
甘い所でいのちゆとふ代るものふ
冷せてそたらを孝行糖（こうりう）　本田

稲荷寿し

寿弘化二年十月以来
専ら流行なる孝家
平永町なる
宮殿の田楽い飯からいろ
ものを一ッ八文なる
甘を下直にして
うるさびせふの
いて食まるなる
蕎麦なる
なる

黒色の帽子
うこんの白袋
にて拵美

せいをとるふちう當年の春いちうてもあ〻大繁昌ちう

當時流行の品いろ

坊主だらてて惡俗さて猫屋の歌でも賣せちう也

ふるしのいつてもこそふいちうさて

まるしのいちうれる初午のとき　谷田

當時流行ものの弘化四年正月

深川仕立　すいけ屋　猫屋のきし

都ことば扇歌　つるじやあいちんだ　川色めのこ

流行いさ〻れたものあらし

黒猫酒盃　まのさよる　女袖羽織　いのこ〻ぬんど

三笠の燈籠　柏てかれた歌　こちのついたいまさる

小娘の茶せんむち　いやけさと色男　黄表紙の歌付

恩きるのやい下り　ちりく玉王　茶表紙のちやれ本

あ下用代のいさみ　あ日なるみも川　元だんのぬけた通人

中廣の前だれ　日傘の紺殺　いたさぬ

高砂おさし

弘化四年の茶ち賣さたちう

衣ものかと色赤縮前巻に

黒みかりち色ちう

さまれ切葉の中形に

服の茶色籠目ち　せちぬ

高砂の　尾上の松や夢想の

松柏生のその下で　壽とも兎とも小到ちう〻て年せまう〻

めてたいち〻　おたからさんちう　大船おしめでたいち〻

狂言にする程其名高砂や
さとよく覚れて食にする物　本田

御利生糠

弘化五年二月二の午の日より知恩院信濃森名物御利生糠
袋紙に紙に宣旨のものつぼ半天い茶の帯をメハさ
き狂箱に入袋ぶらり　せうぬ

ヨヤマカセ奴が
袋の中知恩院信濃の森の
御利生とろろまいのかごをのけて
御陣場いやうりんでこのこうで初くるとのでこの一袋で大きくて
御初穂をやすいもの四文でこのぐんもどきり——ヨヤマカセ
入船おさしー

嘉永三年二月言より入船をと袋にさかる茶色の袋に
黄色の麻の帷箪をさけそうの箱と提物をもつて初ハ
十人程いて来る　せうぬ

ちつと深刻だ入船おかに
買とちくれ甘うてのこいぶ
深刻だちつと入船だ法
巻く入船だ

日々に入船のあ大勢
こそ出もふめら様ちこーとうー
たたさん　本田

弘化三年十月ひよどり雪ふる流しのせうがたふく金太郎の数の
面形鉢の中ようすもつて大地下り鉢賣大勢引つの裔中にたかめの
面白し花色木綿の巾着をそなし
鉢の中からはたらくがにさく笑てとんでおるよとんでおるく
とんでおるよ　ところてて賣ぶ行ちう
鉢の中からはたらくこさく笑てとんでおれたはたらくこさく
ちう金太郎こさくかへ金太ぶいやなら法界坊にさとぶ
とふいひてしり果たる

車輪糖及雷花火

弘化四年二月中ようす宝たさし車輪糖賣り初りて
大地揺て賣人の形ほそ取り流ちて賣人の形ほそ取り流
の裔ち煎ひ車味にて白粉　惣地茶色宝ふしの中形　筆一きい
に車をり白振　ちうう賣ひう　賣せう

夢の浮世に夢さてうすす天道ふ一ある東うう西へ廻るとか
くさんぼうがうんさんだるく廻るのよいのい車輪とふ宝たさし
ぶ来ることいちる
同時に雷ひて夢ちうせう賣人はほ天地半裔に黒雲に
稲妻筆同断大地の形の箱ヨ茶ちそ花のい来れり
賣せう
三国一の親せうる日本一の大家帳
雷ちうゆにおかいちうう
但三月十八日ちうる紙ちう家帳ゆ売せう賣あちう
本田ち　車輪糖おのかせう賣あちう
あるくる廻ちう賣をちいにいちんぶ
もさろ　どちうあるさてもはぶ一の大家ちうと
もおふ来ぶして止む笑ふべし　雷たさし
車輪糖ちうゆ廻りあるいも
地うまちうでちふ人ちう

ながれ寺ゆいて十軒ばかりの浴場ハいと狐せ
られし稲荷の書し書もあり
其者の子あり
おまへぼうちやんどなたの子
ちたしやおちちやんと
おちつかちやんの為利生でおち見たる子だトンガトン（燈をの妻の銭
さなくしいおゆハ一服のんで行やあら
たむさもなもなもなもなさざ
（と獨言して行の列へ
男ぶらるれば市へ
行のかとる（市とる
者子せふ図）
此者の青場さ
西い神四多ゆるる第三日本橋ゆ七時ひろ始めゆつゆひろ

板碑式の墓石

大かゝ一ツハ立半切にして
おゝ以以高くの齢四十三年行いとそで
右ハ四ツとゝ人ハ歌（まそ）を稽ら
三村氏か兄を聊ち石ものハ
石まへ〳〵板碑の遺風ちきんとそすんが
も種る村氏家の右も然かゝ
年号ハ明治中央ハ
法名ハ祥定院
こ石さとあると道に
古板碑ハあるべとそ
予も先年以山あまを川ふ村の鬼神の社ふ
書石まて無数の墓石を見たるそれは此辺の墓と
ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハとあり

鷹匠の祈願

一話一言ニ當時御鷹匠になるものゝ願書ハ
銘をかきて
わくらすると
なん此のくち
をもてハかをくらと九をくらハの
ハカをくら九とハ鷹のくらなるものの身と
梅沙法ハ面ニ大ハ神の託なる詳に唐話鷹の秘訣及鷹経験録ハ
但二書に故高人ハとあるハ知れ

業盡有情
雖放不生
故君人天
同證佛果

鷹の神像

木下川村總鎮守薬師堂ハ
の北白髭大ハ神古木家
日月光ハカミ乳の像なるとそ

佛足石

佛足石ハ日本ニ七ヶ所ニアリ一ヶ所ハ大和國奈良西ノ京藥師寺ニアリ此外ハ退轉ス梅尾山明恵上人天竺ノ佛足石ヲ移シ置ク先年地震ノ時此石總タリ其後大和番頭源四郎侯ノ命ニ依テ新左衛門砂地ニミヲイテ佛足石ヲ番ウシニ一ツノ石アリ窮テ見シハ面ニ立字アリ則紙ニウツシタルニ銘ニ云

蘇婆呼　親河　天竺佛足石ノアル所ノ河ノ名也

右佛足石ハ一話一言ヨリ写ス東京ニハ佛足石ノアル事ハ芝黒本尊河後草寺觀音堂前小石川傳通院等ニアリ

日ヶ窪ノ土偶

近頃麻布日ヶ窪ヨリ二ツノ桶ヲ出セリ一ツノ土偶人アリ古物ヲ形ヲ日ヶ窪ハモトヒナクボトヨビテ江戸ノ西ニアル日ヶ窪ト書ク古人ヒトツヒ所ノ人形ノ意ニテヒナクボトイヒカヒノ物ヲモ土偶人ヒトマガ見ルヒ山系京洛ノ活ヲ(一話一言)

舟の形なる物の丸瓦

ヲハ此人形ハ貝塚人形ニテアラン歟ヲ思フ日本ハ中ニテアイヌ語ノ轉シタルニテアランそれに類セラルル人形ノ像ニ焼タルモノアリ今ヲ戸焼ノ玩具ノ如キモノ多ルコトヲ思ハ貝塚人形ナラン

牛の角河原の堀より出る古瓦に國土安穏天下太平立祿元

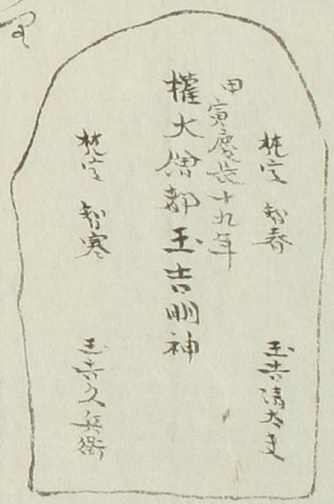
山口作と云文字のある丸瓦を見る牛の角宮と云所にまつる土瓦者こゝ多しとふもの猶しらず故吉田蔦麿の所ニテ絵ヒヒ(已巳五月廿日)

右古瓦の記ハ一話一言にあり三瓦蜷川式胤ニテ考ヒ記ス部有敬し現今大学の人類学教室参考品中ニ有リ大サ

國土安穏
天下太平
文祿元 出作

七日三分尼屋根瓦とさ思まんぬものとて牧子家の
機殿にせんなに作しものかとあもきく
白山權現門前より西辺にめ〜左の方に妙清寺とふ禪寺あり
門をつて北をすぐる右の方に
石碑あり青苔に埋て山伏
の墓なり人さもろ〜の歌
をかけてまつ社に神とも
いまひしるべし詩あるを前より
あて七ちものせといい埋るのみいと多くいちんぞとそ
なるいもしてこさで鄙と一石二言にあり

白山寺の古碑



寛永の戸納図を見るに日本橋の名物あるとて江戸にある橋の
図あり元和の頃江戸の命迫る前けかるにより此橋を
まて名をつけられしを見ゆるが日本の立名を此橋に命ず
せりとは時代の人心をしてかるる大なる名を考ちせとは
思はれぬるとて忘らるは此せのこれに二本の橋あり三本ば
といい男しを日本の文ゆるに男さめしてにあ〜べやとは
ものを

日本橋の名物

生物を本とする 略を四線に三經二論品を翻してを名とする
とは又れ又宗派後序に壁中科斗本の得り得んとこを載す
川柳にいと中の学者今せてさ右男つ　とそれ様軽尼三
右男つ拾茶 北斗 京都 尼三右男つ 北斗 京都 の三人せとろ
たるのこ当山三人と三三右男つとろゆ〜三右男つとい

生物学とする

川柳の三右男つ

文化十四丁丑歟冬上寺蓮池宝珠院蔵板 翁壁去王堂と称する
に記し勧善懲悪を引革と題せり 雷斤久 [illegible]
あり施与におせしものうち中條流産婆のホ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
せり

古今屠腐伝

柳原腐伝とりて古今屠者の角のあるを除ちて東の
方三四町目の古今屠にて屋號小川越屋と云名は松三郎と
いふ主人頗る大腐あり[illegible]
著近世傑人傳

書佐腐腐傳

江戸柳原之南有書佐不詳其姓名頗大有大腐突然
隆起如肉角號曰腐腐柳原跡昌平黌数十歩耳故昌平
之徒生員書者多歸腐腐々雖高貴亦知屠恥責書
籍不甚貪視此高貴傳此屠故之[illegible]生無不知腐者
云腐腐為人真率奴逆士君子今當見之友人相石屋小柳坊富
居腐腐被髪剃薙邯鄲談笑著無人而獨頗敬我
聖賢我聖姓々談天下事自四到多亦不倦也有高節終
身不貴西洋醫行書人或文金案之謝不有今世大丈夫
為高貴之行書書画刀剣茶器瑞屋之蔵董屋收書出
出黙計詐術競毫毛之利胥不知其為恥也嗚呼孰知
高貴之不為士之不為高貴耶[illegible]

文久癸亥春三月 書賜石屋生以致腐腐

立いてさば如ちる書佐の人と趣を知る没年及其墓所
詳ならず (横尾勇氏の柳原さぶ如の跡を拙写す)

和成道に本屋とうる本屋あり
此人が自筆の書きたおされし本を写す（白話と写すとは有まじかるべき筆ぶりなり）
和成道の達磨とうばあり年半で本始めの生まれ変りなり今の
太々講の講いに古本屋ばかり相撲して達磨
見たれば写で広弘本一冊筆記するに一日巻物ちく物る丸
年面壁の如くいてあるとうるに人間の年半なる人で尚ほ其人を見たれば
間でものか見れのてばちい家の生るこずーと前にこの子にして其達
磨公明に既に逝しれのである后頃で筆記したという遺書あり薄
さして今に某氏の有て成らてある其生涯を三ゆりのーた
横本で支（細ゆえに記るしたので一冊の枚数凡二百枚前後である
筆と度ちう起い文化にて支道を為記ことこまう板　サル
のうて支改う明治二年に至る迄に翁が見聞一なる事を

何れとなく記したるものにして其冊数に総て百八十有余巻まである其文章に孫こ変に姫屋のおれ下馬の風聞市中の流り事の大ふとなく記したるものにして其文章拙なりと雖も其事実精確なる為の信し疑はざる事である見つる人を図屋として通称を由あるやうに其本成道に在るおせ
さ弘化三年であるるに自の筆記中にあるとる

弘化三年

其節和成道に三人見世出こ何しも恵こ在横丁より出う出世こ紙屋
徳八に唐人飴横丁より出三河屋長右衛門に山城屋又こ京恵ま
り出本屋由蔵に市野屋市三郎恵より出こ社節に評判故こ
和成道見世出し三幅對

天地人　見立評判記

天如羅氏

紙德

天如羅氏

天如らもかせきもーて金数百万の心欲金が如きて其事
ものを地ニて成也

紙德

紙德の惠みに金もん貸本や今を書林の高屋株なり

本由

小人の人

前に八十余歳の高齢なりて孫しれとい四国へ渡
かりもの利然せず偶りの八十歳ありて八三年ニ孫したとまそ
寛政三年の生になるで見前せるに寛文に前世第一乙巳始なる寛政元年の前の
廿六才の時に寛文の成道見世をしたる乙巳三年前の年四十四方の時
いなるまでまで広設に成して三十年迄の年月を遵歴前で通
したのに家に近世の一時人であるまで弟四心本町なるれこと
響田小芳授ニ響田文に所謂年弟にて本ねとなる人で遵歴前
と親しくせ由なれば其ものられまでまでまでまで

に近い先の文七寛せられ
由を以て前の文七の
寛清貞人定時三の寄子なしが後ま成道 西側定袋高中川
屋の新下道をひめ古本類を高ひしが式時中川屋に住なると
見へなる 其後同側南角天ぶらや（角天と中愛ア）今の大々鮮 其濃新屋と
いる屋の者式濃りて平屋板葺のふるとより起る
と称る迄ありしと何ふられなる筆記せ板老ぬを呼て
欲食ふりまりとせるれ老ぬ こ為の元除ふるとも定迄ま
成道の古ふるとと大概いも明眠ふを後せも日に何後
三重（式せいせ分い通る度に何を書やと イ所なる板意意
いなる五い無き書物なで貸合の程なるこ是時ふ有小西八
年ふるこ其後四ふ三年と賞四やふいも意してるもなく
老ぬ小重（ゆなる）ゆなる国の場ふ是非国に定せよとて

其際由あれば家に多く歳月を経て破損し別れ
其後もそらず
これでる図録の色々いろのものの古物を名とするものされれ和成道
の古筆翁とふ評判いとうの名物の一として有たのを其比の見
立番付に載せ不壁今の立さん筆記和成道古筆翁と書
で此のるのでこの二序にそふぐそ世そし三幅對の一幅も和成道に
のうていぬ唐人絵横ものそふのさのものの山城屋又三郎とふのを今
も太う鋏の蹄りしぬもう藻屋で市地屋ふうも其山城屋の三軒
ずあう西のうる猫屋ふい芸豊かして山市地屋ふ有名なる三三
右番つの一人なる市野光彦の出たらでの城道でも浪ふ古さ家
のうだそうだ中川屋ふの城屋のこちらさうな物であるが
も　いむつう社面ふちと面てもうた
共ちふゆり定紋ふいふ家年のため面ふしう

山崎屋或筆記いとゆ
下平井久左
四郎文ものの
城屋ふ面せ
ちふの古物

三村清三郎氏義せう張也帖に山崎屋或筆記し置さ
ものあう武州葛飾郡下平井村名主源左衛門四郎文所蔵こ古墓其他
二月録あう其中に銭貨いに関せしものを本書ふ通ふ
おく

一銭座の幟　日ノ丸木綿

右銭座ふ鳴海刑部勝とふ東山将軍時代ふの銭座に
て永樂銭を吹もり中古佐竹に由緒あって常陸水戸より五百
石領せ寛永銭吹うて居ふされ今芝新銀座にて吹ふり
四ツ家こ縁類ふう

一古銭を鋳し第こ古書写にて今其図のみ残って銭ふ

一正保二年家綱公あ元服あ入用鋳

銀錢

裏
母錢

金錢廿千文
銀錢一万五千文

寛永十八年幕府鑄

貫数
十八貫文

金錢

銀錢
家賣
文錢

表

母錢

裏錢

文錢

表

廿八文

七上
裏

文政十・廿五月以最小藏本書写
北峰山崎美成記于如舟堂

このこの図記は平井晋吉氏と頼せて
もの
浪華の人富さ谷東趙子が著る年代早引一寸目覚と云ふ書に寛政
三年に面口合と云ふものを記せりとの記事あり此のものかを思ひしに
面口合と云ふ面六枚を帖せりを猶なり二通ぞりにて面の上に文字あ
り半文字ともやもしやはりやうなりもそりやうなり

面口合

朝鮮錢貨
鑄造年代

本文おいせ七度熊谷／／三度
本文ものらざるもの／／四度
本文三笠の四ツ方／／四ツ
本文高ひくくなる方なるもの
本文あさきものみし

右のごとく画線の上に一々本文をもとめしとある地のすべてを
八本契三郎氏朝鮮國の錢貨鑄造の年代を韓地に於られる某さに
同合されしい高麗食貨史より調べられしものにて

鉄錢　高麗成宗十五年　錢文なし
錢貨　穆宗　五年　〃
錢　肅宗　二年　〃
錢　〃　二年　錢文あり　七年海東通寶

熊谷芝／／

二年頃銀瓶を通貨となすを朝鮮人著書に見る

恩賞武番氏宅にて同物を漢法今あしめ主人がもさんし給ふ

次にあり形せる
ものの地紋形
のせんの
ものにて
武ぬ
熊谷
の熊谷寺門前のかし／／やにて天保年間に焼ぬせ／／熊谷せん

熊谷
せん
ものに

やそのの画像

[illegible]ものゝ久敷年間この[illegible]せんぞ[illegible]を[illegible]おさぐあしと
[illegible]形の[illegible]せを見[illegible]
[illegible]なるゆゆしやせなるものゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]縁ある[illegible]
蜀[illegible]人の一法一言[illegible]尾[illegible]智多耶大草村[illegible]に耶蘇を[illegible]
一軸のその徳具のきれ古代のものなりとあり耶蘇の像画の古く
[illegible]あしたちゆく間[illegible]ことなり[illegible]十五年の比静岡[illegible]
[illegible]の家に[illegible]天として徳具し
あしもの今習[illegible]ばかりやの像と思[illegible]
[illegible]と法[illegible]れしことあしと又意[illegible]井川[illegible]に耶蘇の像の
仏[illegible]にあしを見しとの法[illegible]
[illegible]

弥勒の年号

弥勒年號の事一法一言に會津舊事雜考承安元年辛卯十
耶麻郡新宮神書銘の

大勧進僧　淨蓮證一
會津　地頭代　左兵衛少尉藤原知盛
小宮宮預り所代右兵衛少尉平國村
新宮彌勒元亨卯二月二十二日　コレヨシブ弥勒十年庚子より辰年ミアラズ
桜彌勒の年號めつらし三百五十歳の唱歌に
彌勒十年辰のとし諸神の遷りる御屋形
[illegible]
又桜見原井筒の川普請の中武州山崎細とゝ村に寶蔵院とゝ菴の
墓に彌勒二年庚修[illegible]永[illegible]
此外に往古年号逸籍に記せる[illegible]
[illegible]
右一法一言の記るゝ共古桜に彌勒の年號ハ干支を以て正しく何れ

の年に當るとふことは定められぬこと、考ふ社年号い信仰の勝手に記録せしことゝ勒とふを用いし年代も異りあると見め三の方歳の間に十年程のことと認めて前記會津のい元年辛卯とし三宝那寶藏院の板碑には二年丁卯とあれば何れもこれを以て年号とせしなる事疑ふべき出来ぬ

墓石の年

鈴貫上平の墓石の年

碑面は言文が谷中初音町の武蔵石工の家に無縁墓やう列置とふ形なれど墓石あり由こゝ八年のこゝろさ傘をさす鈴貫のこゝめきあり頭巾かぶりたる人物の立ち図にて浮彫ケ彫りと上に横たるあり

右の文に得善の清信士とし左に天明四甲辰年九月廿九日と刻せり恐らく鈴貫上平の墓なるべしと然らん

文久保西山の文度

文久保西山の文度は谷中屋敷の家に戒書多く家の下にあり故に書を愛爲林屋文庫の印あり

右文久保西山翁文度は特れ屋代詩賢大夫の書也文庫

二潟ち下は拙ざ史已粉ぶ

ぬき右之明分西西也(注言)

算術に名高き関流の祖関新四郎八年已七月廿四日

紀右蝶 妙吉

法行院宗達日心

文那いとなる祥書

也巳詩に碑ヶ碑ヶ如平信敏藏野寺日蓮宗にあり

也巳宣政中年越中富山春日山光厳寺洞水和尚此國につれりてかの國に

こびたる祥録也書写しもろにいとゝさん事也ゝ文ふそのの書用

洞山祥師語録 曹山師語録 却外録 宏知録 拈古録

章ゝ勅外録高本蔵千家寺仲春念四

(一五二言)

和文倉

寛政五年七月十八日以所賜金剣建同六年甲寅六月十八日畢

天明に唐本直段

唐本直段付

一大平御覽　百七十五匁位　一佩文韻譜　二百廿匁三分三厘
一淵鑑類函　三百廿匁三分　一品字箋　百四匁六厘
一通雅　二百八十匁余　一正字通　廿九匁七分三厘七毛
一潛確類書　廿四匁程　一正說部　九十匁程
一續說郛　五十四匁程　一藝文類聚　三十六匁程
一康熙字典　百十三匁八分　一厘五毛

天明四年甲辰長崎にて唐人直段に奉行所買直段之由程と有之ゆゑ
其節特渡無之書之由

法華寺の古書寶物となる

大德寺の古藏書なほ〳〵都下に出て寶物となるしと云ふ（慶元堂の説）
緇濱文集　二十卷ほどあり宋板也關卷あり一卷價二十匁に購るとぞ

湛中年譜　大ふ板也とぞ

苔あるべし

楞嚴經廣注　版　文中子　版

（一六二三）

茶和重寶は山井にて拵造せしとの說

もの〳〵金の五寸宗より山井國の茶和重寶の錢を賜りしあり山井にて
そのかたちを以て錢を造て佩て登勝とせるせその錢二つを特川甫周法
眼より得たりとて姫路の城主酒井雅樂頭忠道見せたりしを蜀書にて
うつしたるなり

往古金より鑄し錢四匁ゐ〳〵山井にて拵造せしと云

武州多摩郡柴崎村普濟寺六面石幢の事前に記せし柴崎村いもと五川
村といひし所也五川山の天鑑と云ふ僧密宗の一派にてその僧侶の具
也法嗣の鑑修法不正の事ありて密流す此時五川流の密宗斷
滅せり此時今浅草金王に傳ふと云碑面の年號い後を普濟寺
いこわしし時刷しとる天鑑八年嘉山我淳和の時の人弘法大師直筆

（一六二三）

日蓮修性院の石表

のよしなり（お井徳入こと此世まで此ものとり（ゆ）びて）己巳十月さる所神本弘字所語（一話一言）

江戸日蓮修性院日蓮宗に石表あり

夫當寺開闢者元禄年中觀現院日曉上人到于斯境寺建立

寛政庚戌迄凡九十餘年　八世境智院日政（一話一言）

對馬の古鐘

對馬國にある鐘の銘をとて人のみせしに

對馬州府中八幡社鐘銘

天寶四載乙酉忠仁大夫爲支只山邨先畫寺鐘成敎之成

記時願助左衛門村宅方一切檀越拜成在願有者一切衆生

苦離樂得敎受成左衛門雇乃社幢主

右の文語ふるめかしけれど文体の為ぶり成さこの所此方の人の文なるべしとおもふに

天寶の年號を用ひて疑なべし天寶四載乙酉とあるは此方の天平十七年にて西

にして聖武天皇の時にあたれり三野國那須の郡の弘福の年號を

用ひしも思ひあはせべし鐘の模様に天人二つ大きなる菊花の形など

さりなるもあるべき（一話一言）

弘法外典抄發見さる

具平親王の弘法外典抄四巻散亡して尊いらぞ談峯の僧光榮甲

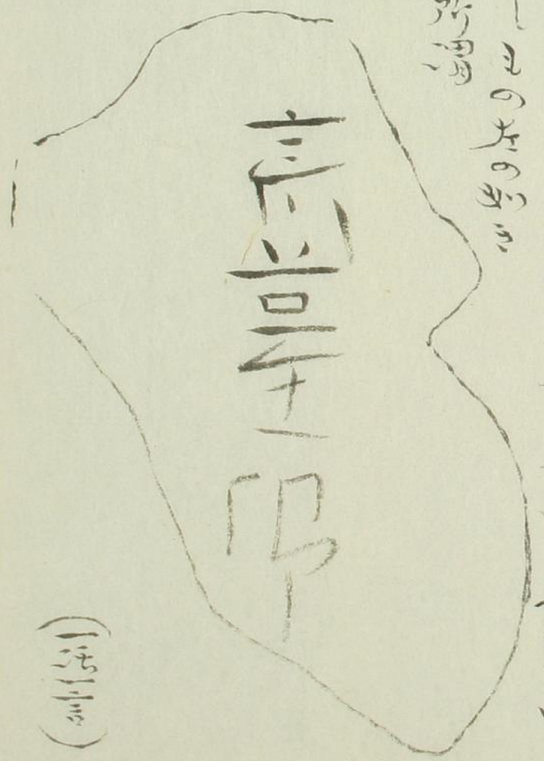
州身延山の經藏に得て板行す寶永年中の事や（一話一言）

此迄よりも一段の研

駒込のよりもおもしものなのおもしき

文言あるは弘法抄に所謂

紫蓋郷にや



（一話一言）

山谷正燈寺の池の辺に古墓あり

寛政三年辛亥六月

土岐八郎墓

戒名の古墓

戒名専当屋鋪に古碑三あり戒名並本東側所屋のうらにあり

雷神ゑのよい東の方南側茶飯屋たばこやのうちにあり屋ふ七月廿三日

なりなれ見ふれ、今幸便一さたるの

立宝

右ゑりの五輪の頭

究竟妙覺トアリ

（二字二字）

檀隈武成墓

戒名 茶屋所雷穴ゑ事物行く右身

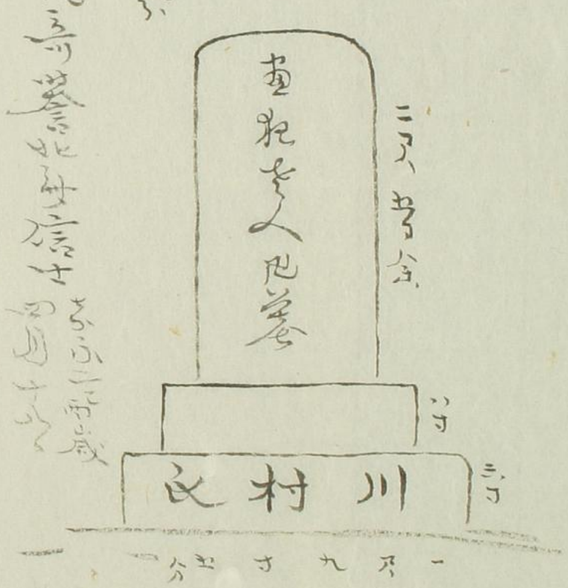
紺屋の干場あ表に古墓ゑ三の塔あ元

古墓の高ふ者見しゆの図

北斗の墓

中鳴北斗墓

法華永住所菩提寺



南隠院高野墓北斗信士

石

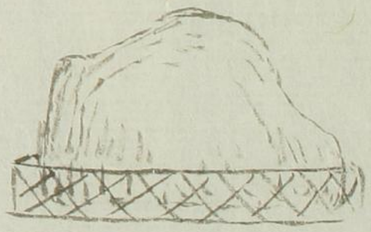
市谷見治の烏帽子石

徳川時代の者と思る見治の石で今見てこと狩る石と云ふ石の外なる支もら石でのまに見てそれ狩ずの石でのの右中央にあしとふが見治の石さ取壊れ此石も廃石とともに石置場の中央に据られてあるを考からべ何んかの工事に用ゐる、ことならん大横一丈四五尺八寸

駒止石

駒止石

此石もとは川原にあしが茂り
接網所の安田某氏の邸内に有り
徳川時代吉原宿の茶屋此石を
川の中へ火鬼として つき出したる
ものとあしをやゝ〜刈りたるとの
話あり今も四ッ目よりの石と
据へて駒止石とぞ駒止の名
出所定かならず義家の駒止石なれば河部某後宮が渡田川を甲の夢に
此の地にて馬を止めしなどと業平東下りの時此地にて駒を止めい
さこの所名の歌よまれしなど名のおもかげとして面白しかが
終の話なるべしとかたる



狂歌

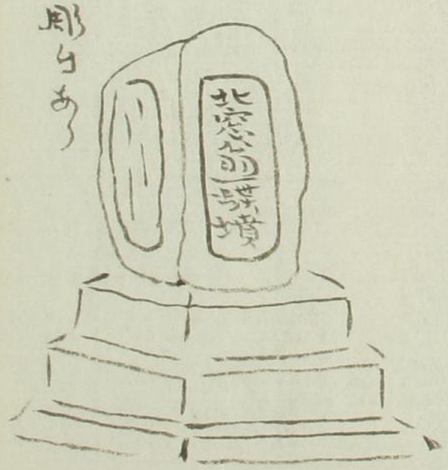
狂歌物茂郷先生墓

芝三田豊岡町長松寺にあり
現今墓碑苔蒸れ碑文読み難き
様過ぎの石碑物郷先生の墓地に
て高松藩主の高廟のところ
其角のもとに 梅か香や藤ハ萩生總右衛門 とのみこの墓碑にあり

英一蝶

英一蝶の墓

芝二本榎長祐山承教寺にあり
墓石は四人寄付
享保九年甲辰正月廿三
日さらば浪世界花の色と香も
あるとや月のゝす墨の空 英一蝶書 と彫りあり



斎藤清盛の墓

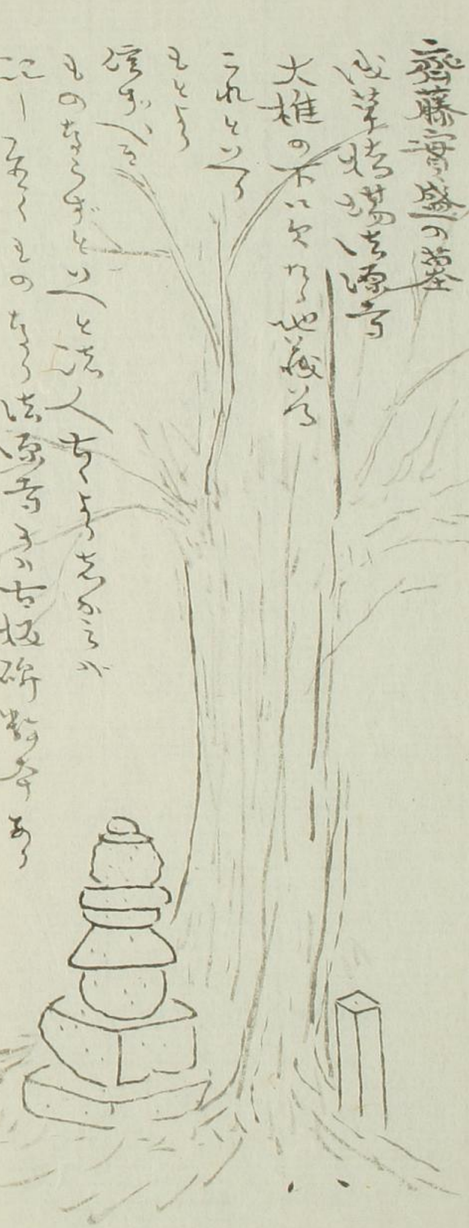
改革時代に原寺大樹の下にあり地蔵尊これとなり

もとより信ずべきものならずとの人ちらちらがこの一ちくものなり法原寺まいり古地蔵尊

法原寺は保元の年に建らんしとの伝説あり

また保元前後弁年号を後用して建ちたるもの数多あり

[illegible]



十郎舎一九の墓

下谷久住町東漫寺にあり

五人計り心月流一九日光信

天保二年八月十五日世此世をさらばやいらまにせん者のかもにつひに成仏なるらと刻しる

二代将軍秀忠公の愛馬布引の墓

芝赤羽心光院にあり

ころも塚

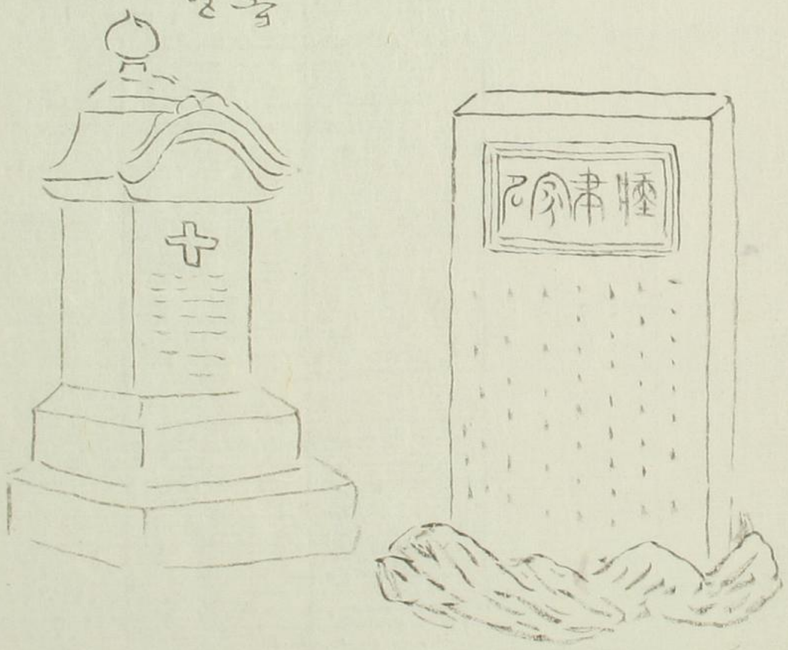
衣塚

浅草田甫町一ツ屋稲荷の社地にあり
弓削道鏡の衣を埋めたるとの説あ
れどもどころをもらず此辺を信ず
しかるに衣を埋めなどしたる
ものもあらんか吉原に近き地ゆゑ何かの
迷信なるこの塚ところをかへるべきなり

ぶくろ塚

豕塚

浅草箕輪清閑寺本堂前にあり吉原の娼豕を養へば火災を消くと迷信し豕を火にて飼いたるものが死せり之を葬りこの塚を建たるなり
天保十一年にたてり



筆塚

蘭人の墓

馬琴の筆塚

日蓮宗里青雲寺にあり
廢筆塚名の四字篆書
無名刻所の説あり二ツ
可入計なり

蘭人ヒウスケン氏の墓

麻布一番地町世古田地光林寺
にあり寛政元年十二月五日の
墓日蘭人前町うとこ殺
せられし墓なれば建書にて穴の
墓なり

武田の石塔

信玄所有の石塔

深川萬年町西福寺にあり統三寸
一丈余れ屋の流るゝを先年此塔の
為め倒れ今は本堂の前に立てあり
信玄ゆゑを以て墓碑建てしと
同寺へ納めたるとの事なれども
信玄石塔とは思はれざるなり

龜塚

芝三田聖坂上華光寺の前
にあり寛延三年に立てたる
龜の名称の起源なるべし
雲龜の墓とも龜を出したるとも

自遠落生墓

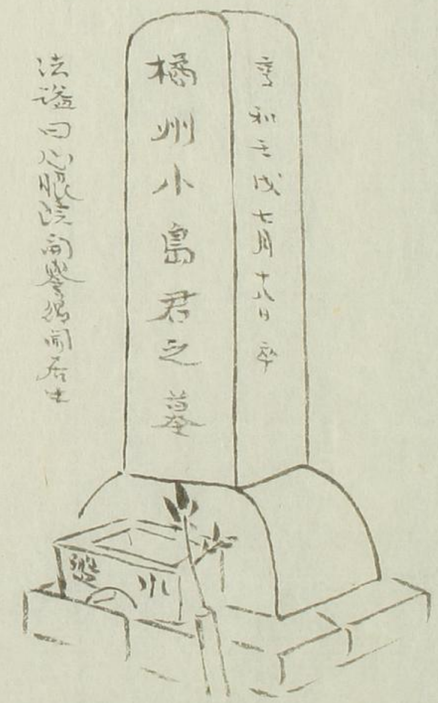
自遠落生墓谷中日暮里養福寺にあり
碑陰長文の銘あり男山の
假名世説にいひあり文政四年
年四十の一てらかれに拓を造りたる
その拓をの回ぬのなるべし

養福寺の文字は
学問ありて
能書なる
人なるべし
銘も自ら造り

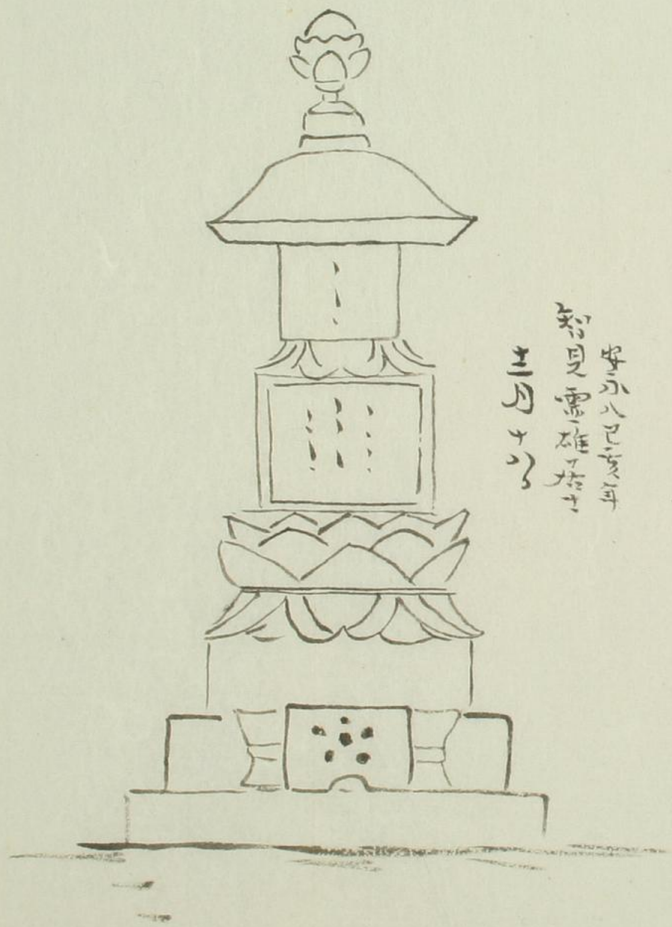
谷文晁之墓　浅草北馬道町原宗寺にあり

雪中庵蓼太墓　芝高輪泉岳寺にあり　天明七丁未九月十日歿

小嶋橘州墓　赤坂一ツ木浄土寺にあり



平賀鳩溪墓　成子橋場總泉寺にあり



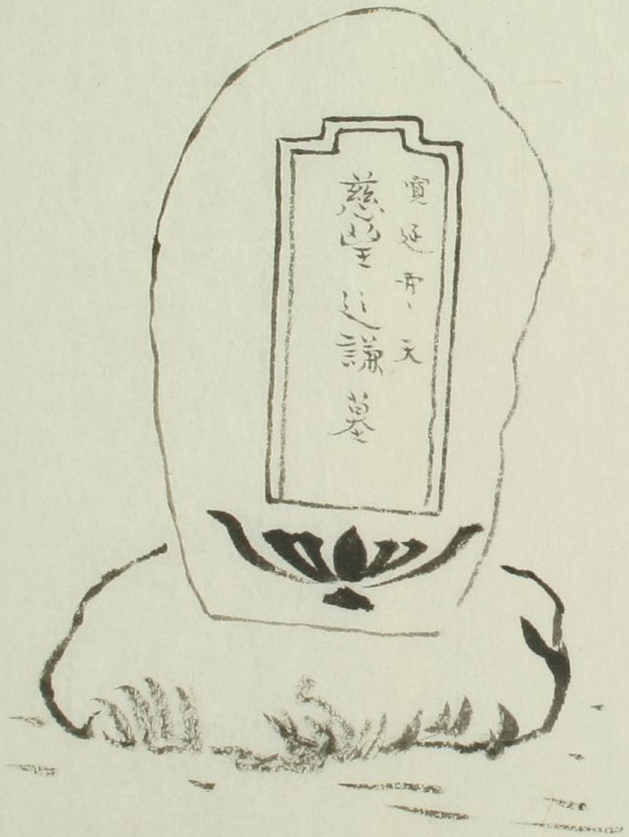
歌右衛門

中村歌右衛門石像　新高野山にあり

寛政元年七月十日寿齢七十
安政四年四月八日

九郎兵衛

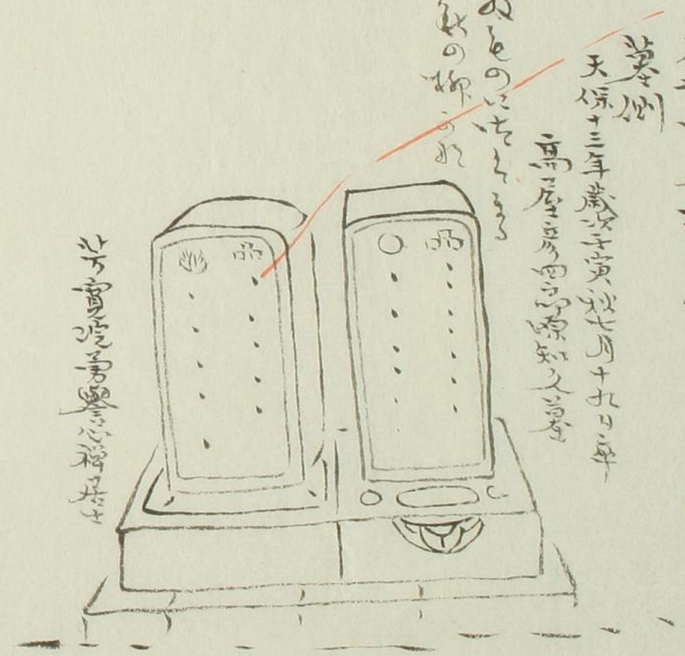
大野九郎兵衛墓　心光院にあり



種彦

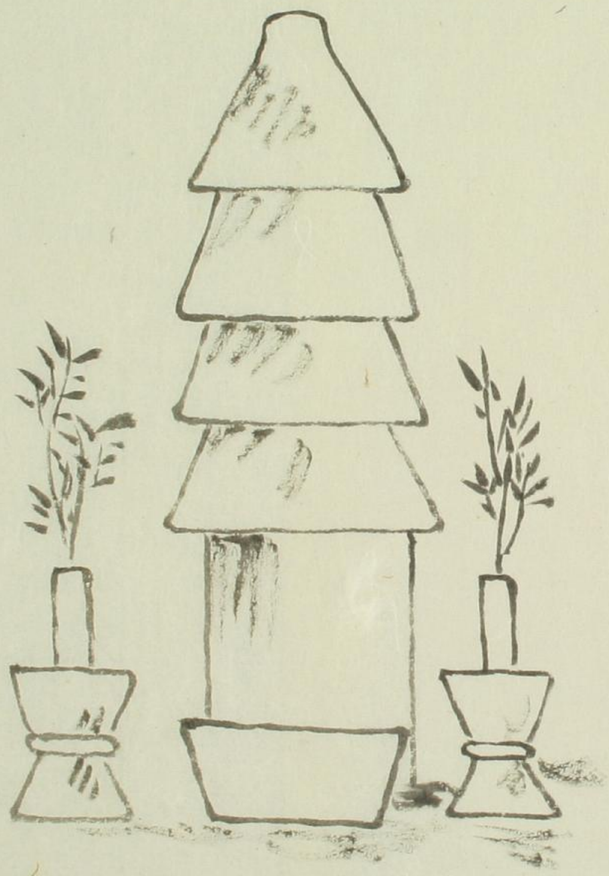
柳亭種彦墓　赤坂一ツ木浄土寺にあり

墓側
天保十三年歳次壬寅秋七月十九日卒
高屋彦四郎源知久墓



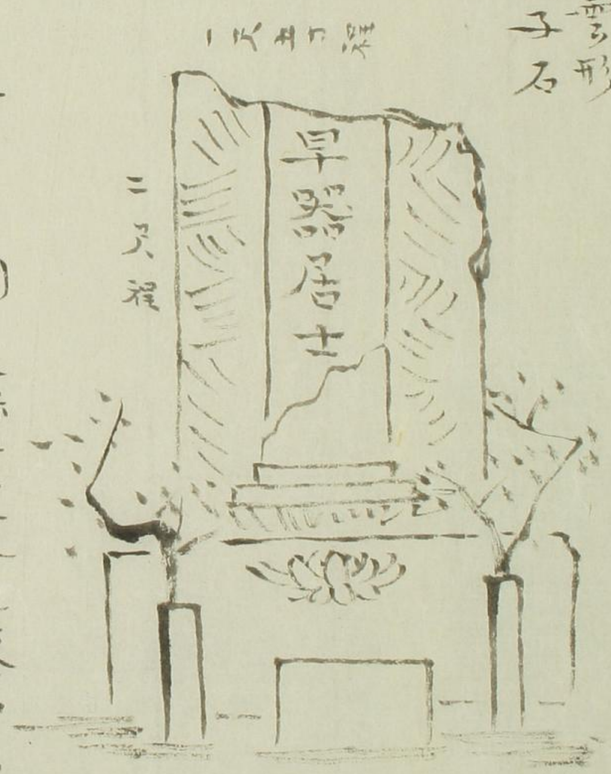
頼朝公

源頼朝公墓　鎌倉



早器居士瀧川一益墓　在銚子飯沼山

忍雪形
銚子石



此墓石ノ側ニ元禄五年建タル墓石モアリ

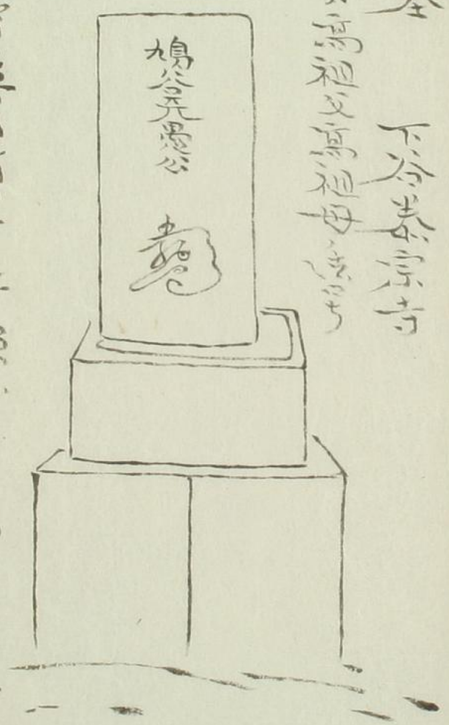
新荘左京大夫晴元ニ與力シ攝州ニ弘ラシ三好長慶ニ敗レシ時ハ細川右京大夫高国ノ被官ニ成リ次ニ左京總國西ニ三人滝者アリ其ハ後ニ左ノ物ヲ飾ラズ財利ヲ貪ルヲセシ一瓢ヲ手ニ軒ニ掛ケ里人ノ贈ル物ヲ受金ハ入ル瓢ヲ空ニ入レハ求ル心ナシ三好ノ者ト聞及ブ左ノ如ク攝州ニ居ル

左ノ者ハ能知ベシ世ニ住キ彼者ニ逢其事ヲ聞ベシ墓碑ニ元禄五年丙申六月十八日ト有ル逆修施主敬白

于時元禄五年丙申六月十八日　山城國住

直頼乃西に行き彼墓者の墓に年七十餘り桑門法華經を誦こゝに居り
名を愚歸と号さゝる直頼物語に次いで今茂の事を活出せこゝ新屋なる人
茂死並に茂兼の者の首級をもて直頼に送る西其新屋
に某が父直昌なる者也ゝ石を立て河内数郡を直頼ナツカシサノアマリニ名さが
姓氏を問ケレバ更ニ云ハズ直頼又問つゝ其名茂の時金鄭に親の法師なり
下知せし武者アリ問是住人ヤラ名さ答曰某也ト終に姓名を告ズ直頼川越の
此西に言ヒシヒしバ大樹現ありて御歳アリシトヅ
右寛永諸家系図纂の卿流
里人の説に石碑梁に某高さ九尺ばかり遥里中石碑アレバ遥に五輪塔ありト
右碑在下總國猫山郡圓福寺堂側
勅湯公欲修唐書乃集金石古刻之有益於史者以聖武蕉書恒婆
今茂士號家譜作總歸而碑則其所製乃畢當此而古刻之有益
於史者然則金石之蒐豈特好古之具而已哉
御南遠
碑墨本（一五三）

天愚孔平墓　下谷茶宗寺
此墓の正面に高祖父高祖母の名ちゝ
刻こアリ



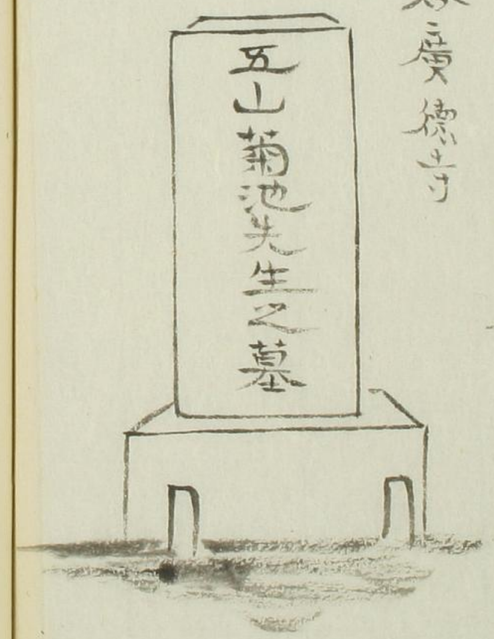
碑銘

鳩谷天愚公天資英才有異見世儒深要真理学著書等千世系
事跡多可誌者墓碑約不容文立題名碑於祠堂之側兼記其狀
如世系墓在于光復堂君墓及深川恵然寺祖考長水君墓藤
山氏先塋公諱信敏字永之以秋野稲喜而出雪戸人也享保
二丁酉年五月二十九日生文化十四年丁丑年四月一日歿享年百有
餘歳縁山浣鳩谷求敏君士配村田氏生三男二女女貞鐘浣

嫁東條氏女産子幼死男瑞夕殤女智秋殤女嘉代嫁天野氏
二氏從醫騎郎女産沢嫁武州人王子系號伊丹屋男信龍出雲國
美濃嫁出雲侍醫加藤氏男信鳳出雲國五山氏過子各有子子
孫世世多有玄孫耳孫不見其而者銘曰

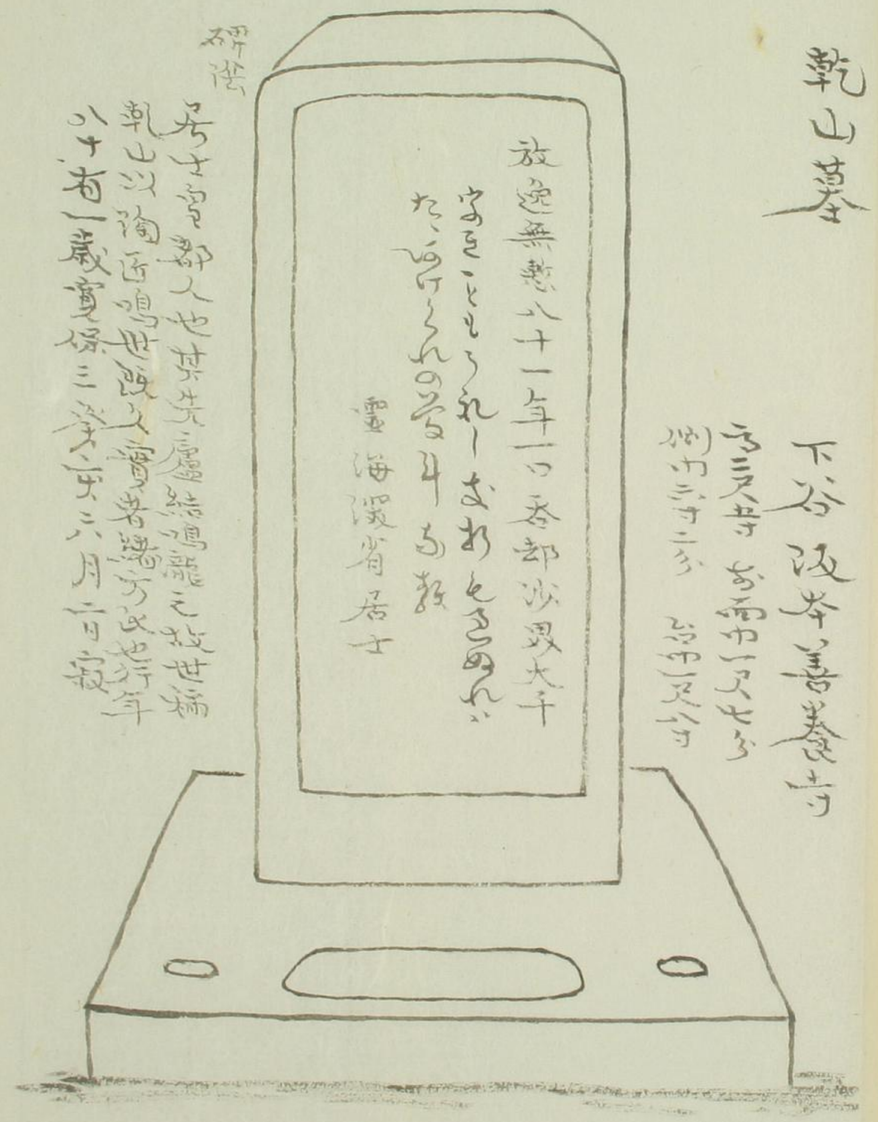
今德猶善　維之佳慶　延年久視　諸孫懷〻
族人出雲〻藤山　玄春道　記　雲濱

菊地五山墓　下谷廣徳寺



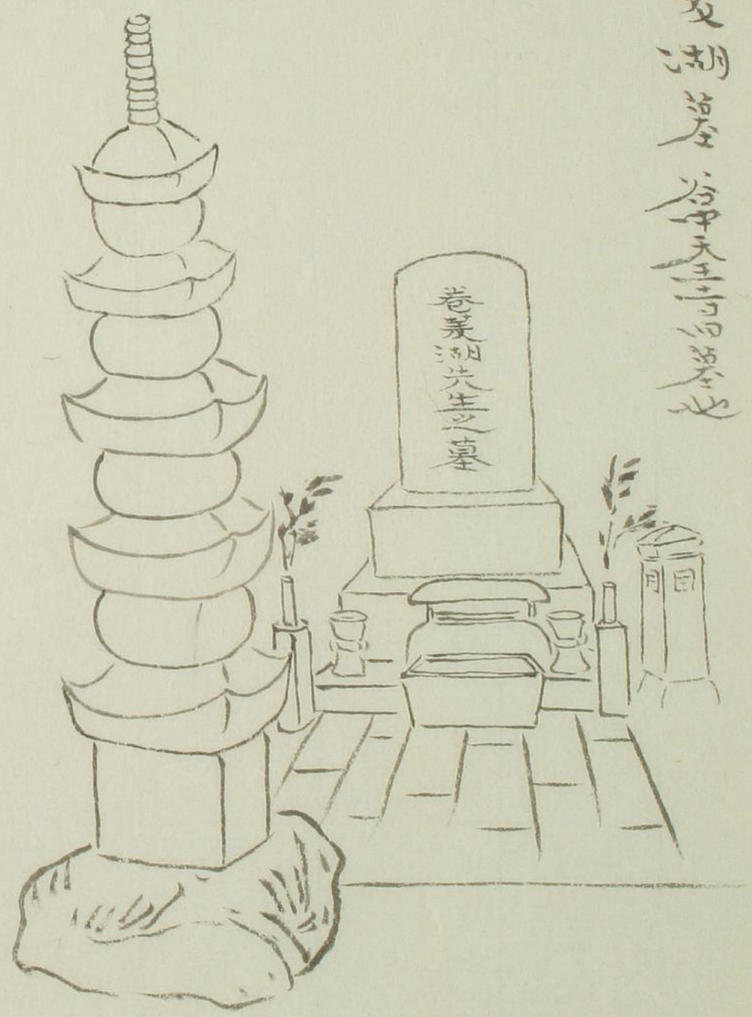
乾山墓

下谷汲井善養寺
高三尺巾　表面一尺七分
側面三寸二分　底面一尺八寸

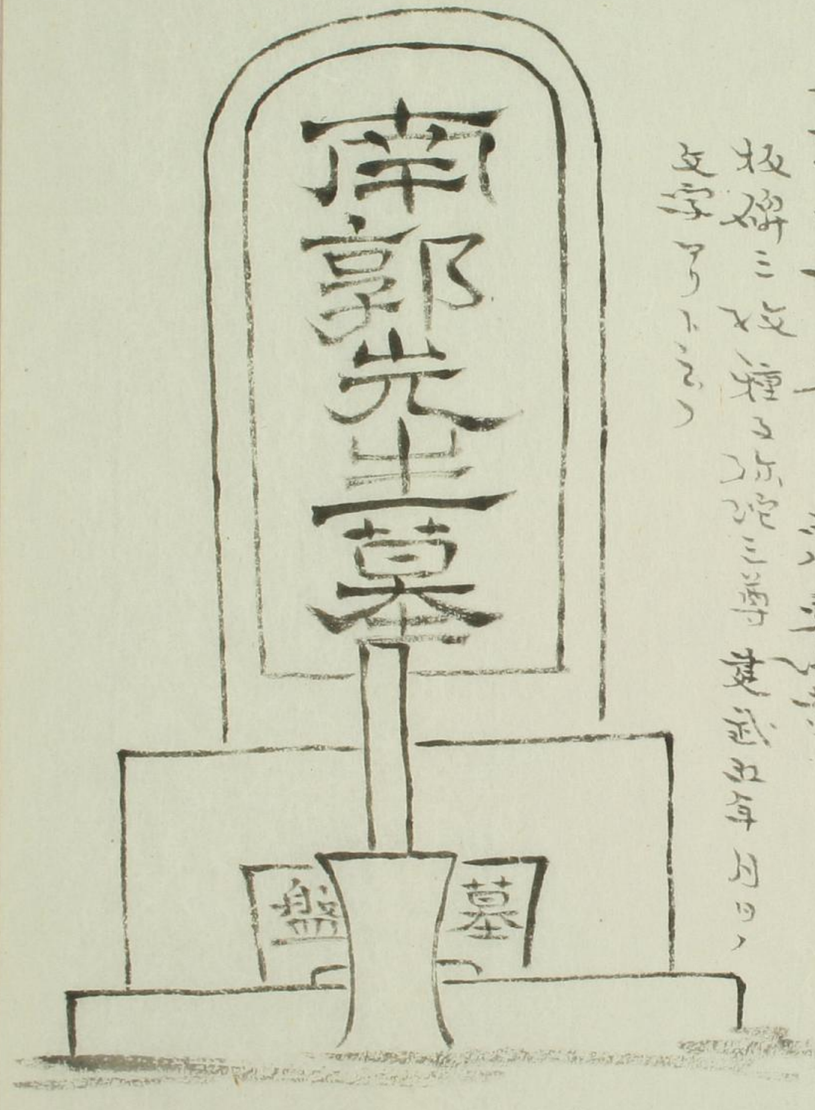


研堂
吾友尊鄙人也其先廬結鳴龍之故世稱
乾山以陶匠鳴世既久實著幽方氏也行年
八十有一歲寛保三癸亥六月二日寂

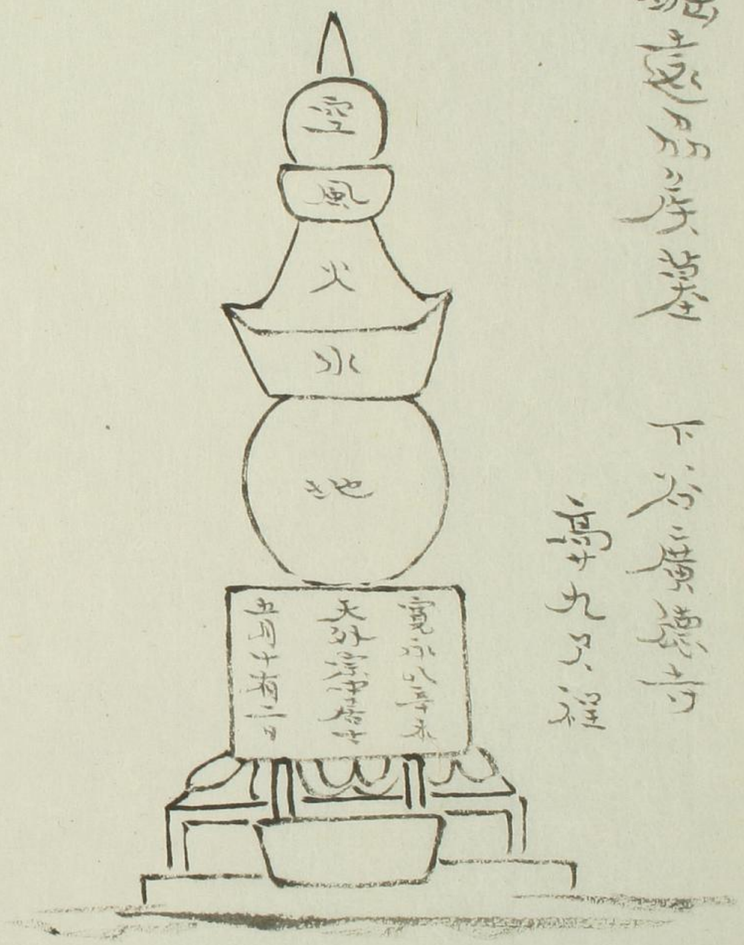
巻菱湖墓 谷中天王寺内墓地



南郭先生之墓　品川東海寺
牧僧三枚程ヲ以陀三尊　建武五年月日ノ
文字アリトモ



小堀遠州墓

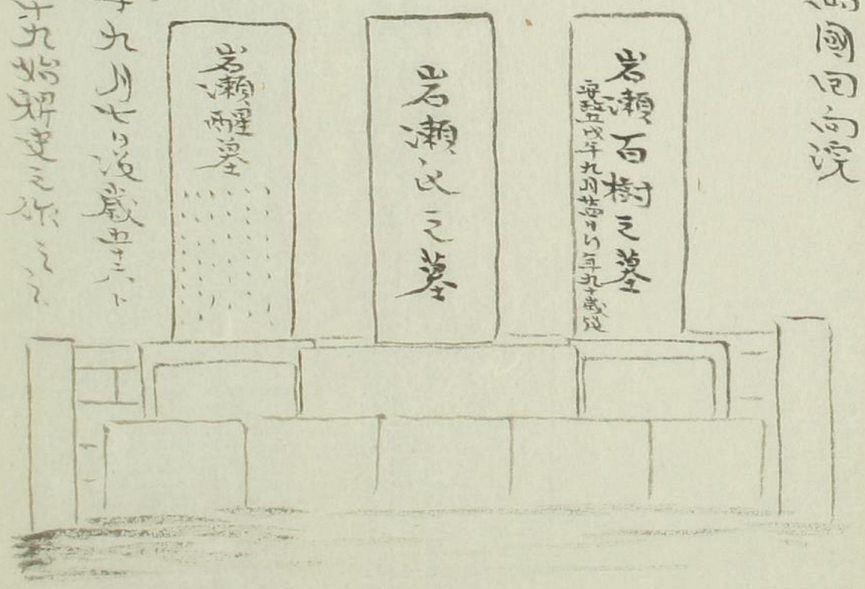


下谷廣徳寺

高サ九尺程

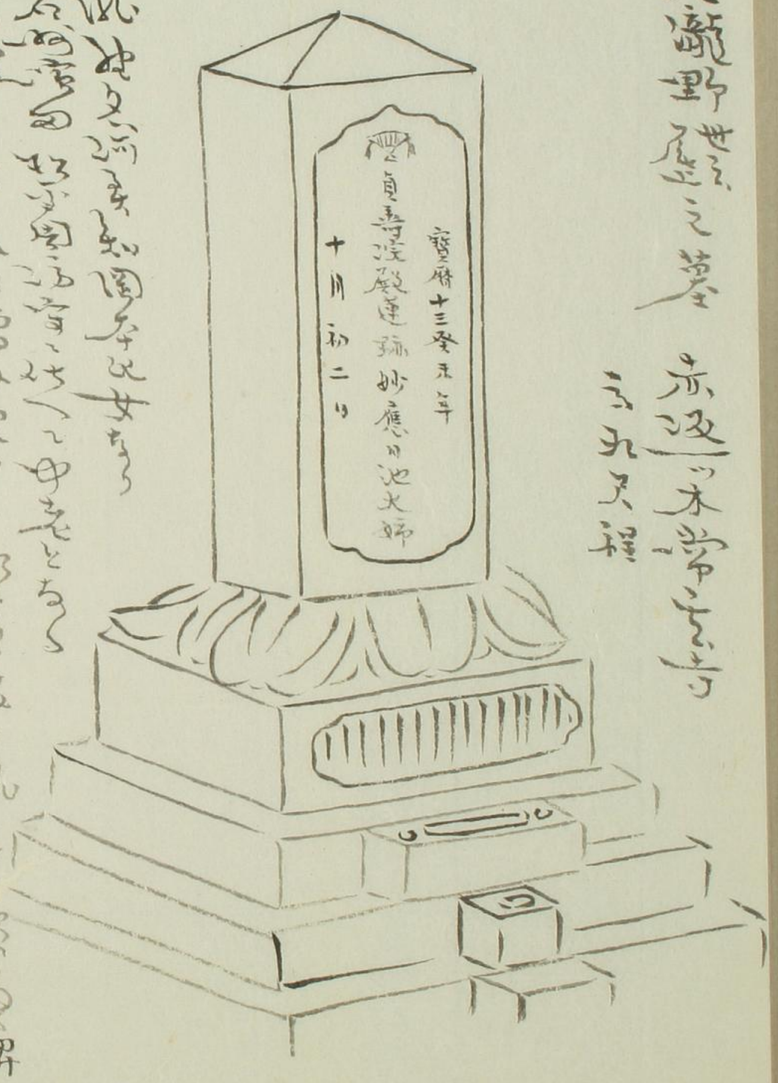
京傳京山三墓

西國回向院

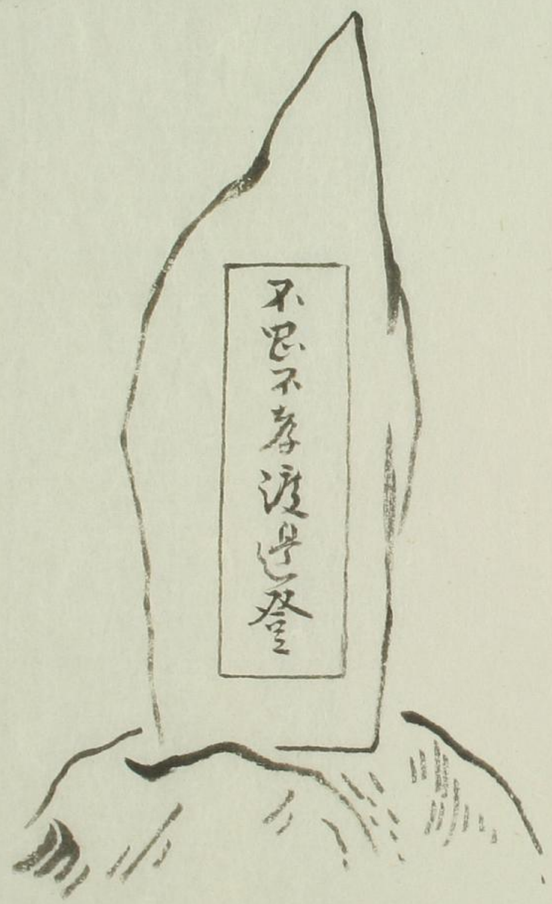


墓碑ハ亀趺ノ上ニアリ
文化十三年丙子九月七日没歳五十六
十方菴弓画文白居士ト刻シ碑文ヲ作ル

中老鶴野氏之墓　赤坂一ツ木常光寺



渡辺華山之墓　深川靈巖寺

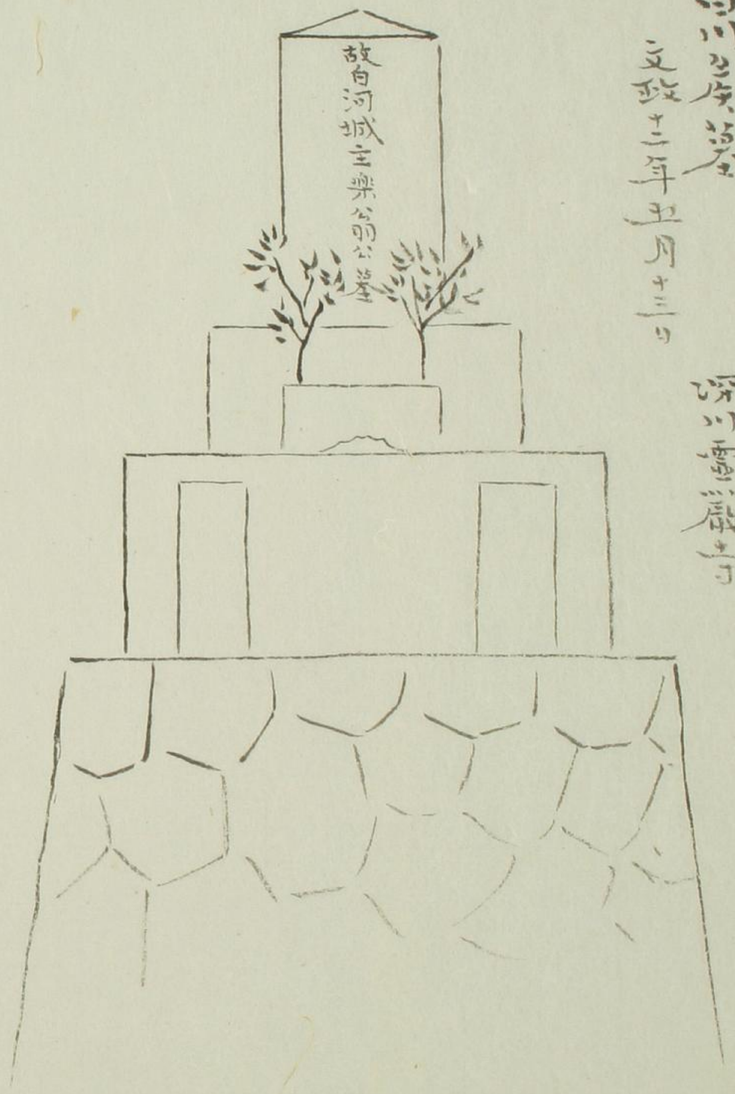


樂翁公

白川侯墓

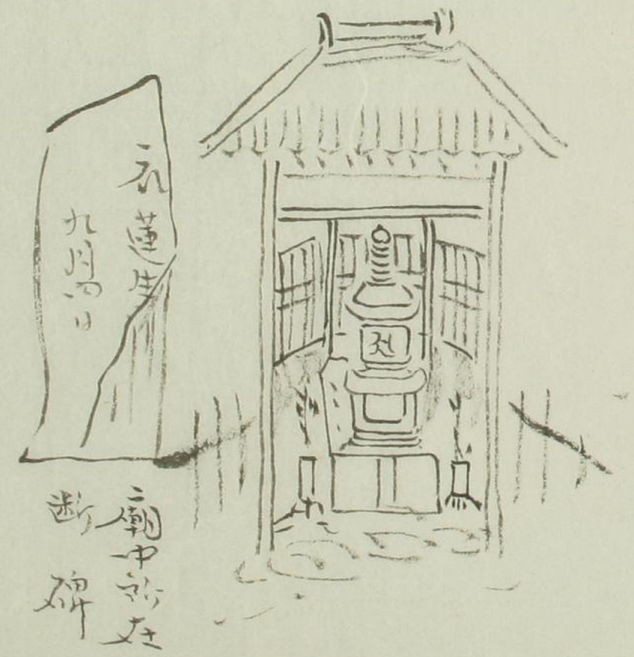
文政十二年五月十三日

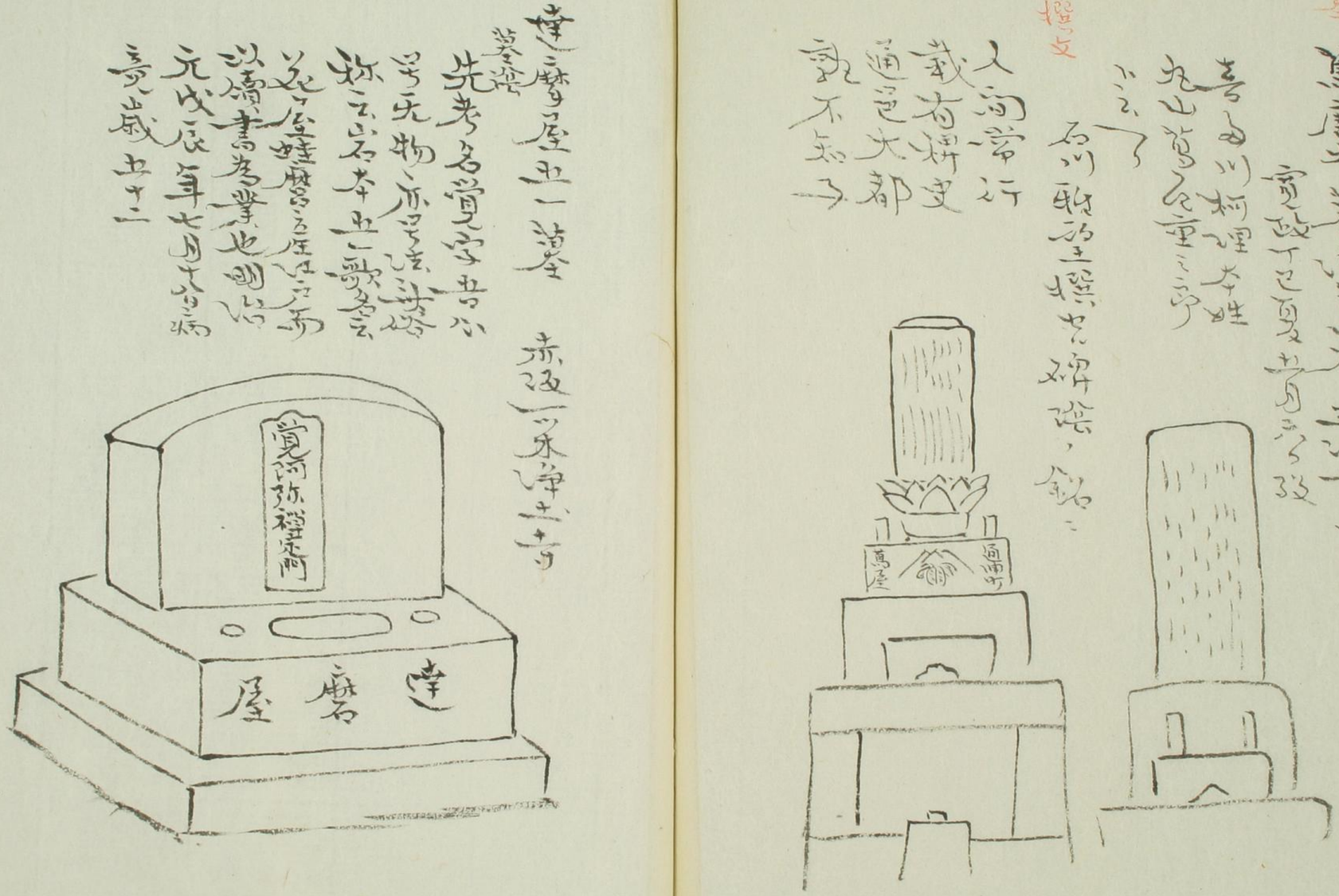
深川靈巖寺



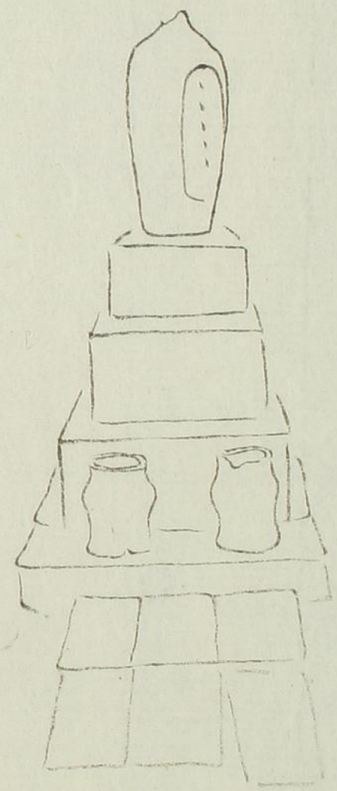
蓮生公

熊谷蓮生墓　武州熊谷寺熊谷寺墓也




いちくからねの墓
鳥唐丸墓 武蔵国山谷 正法寺こあり
寛政十巳夏 月ヶ瀬
吉田川柳 女性
丸山 百屋童子
石川 敬五郎
石川敬五郎の墓碑文あり
人間常行
載有姓名
通邑大都
孰不知乎
高屋
高屋
達磨屋十一墓 赤坂一ツ木浄土寺
墓碑
先考名覚字吾八
号元物 俗称
称三石 本姓
歌名云
元屋蛙磨 元屋仁右衛門
以墳書為業也 明治
元戊辰年七月十日病
亮歳五十二
覚岡弥禅定門
達磨屋

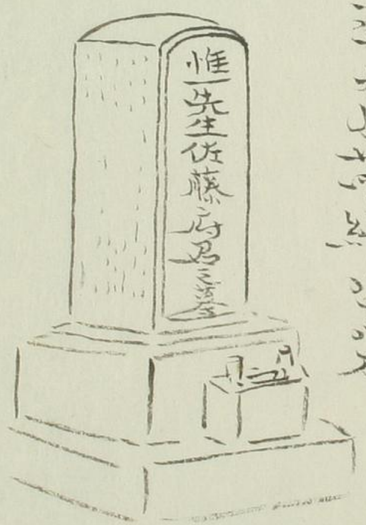
抱一上人墓　築地西本願寺



等覺院文誠法尊
背
文政七年戊子十月廿九日

佐藤一斗墓　府中法華寺

安政二年九月廿六日終　八十八才



名巡堂大道弘一居士　弘愛山梅又老五軒不二翌弘安堂三百之翁四月八日
寂院名共也号之如三弘道觀老軒初名信行號本氏新藏又藏年
二十改称捨義以安永元年十月廿日生行住江戸浜町安政六年二月四日
終享年八十有八

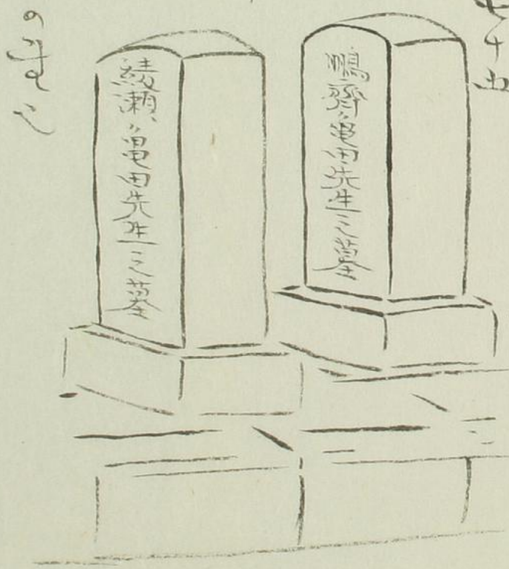
狩野興以墓　赤汲臺所五丈德寺

名定信号興以又興斎称先祖狩野
足利人者京男之流ハ人

寛永三丙子拾
八月廿有七日

亀田鵬斎墓　今戸称福寺

名長興字穆龍称文左衛門ハ安井之人長善ハ堂文政
九年三月朔歿享年七十出
子綾瀬名長好字水主
称三郎ハ文政四年四月
歿年七十六
孫宮名名敬字任夫称
孫二郎



言ふこの歌ハ鵬斎の手ぶり

わわさ
ちじやう
石

陸奥の靜谷城址に古七人塚の石碑あり平片面にてわわさちじやうと刻せり

わわさ
ちじやう

無量院の碑あるとぞ

此石現今の城址より數丁あなあり岩間中に建てあり
岡山藩の碑か年紀此石を見るに
不明なる寫山寺如と見さること文字わとせるら
しか 字形

芙古日錄一 目百八十五